日の本のお殿様

ミスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
日の本のお殿様

【Ｎコード】
Ｎ５６６５Ｘ

【作者名】
ミスター

【あらすじ】
様々な歴史上の偉人の逸話を面白くして紹介していきます。

勿論、史実です。

１話が短めで、毎回物語は繋がっていませんので、好きな偉人だけ読んでいただいても構いません！

ゆる～くやっていきます。

後書きで真面目に（？）解説します。

一番槍　東北の独眼竜（前書き）

さあ始まりました「日の本のお殿様」！

記念すべき第一回目は伊達政宗です！

勿論、物語の内容は史実です。

一番槍　東北の独眼竜

「ん～。この茶器は何て素晴らしいのだろう…。色、艶、形、そして重さ。何を取っても非の打ち所がない！素晴らし過ぎる！」

こちらの殿様は伊達政宗。
独眼で有名。
今も根強い人気有り！

彼は茶器がとても気に入っている様子。

「素晴らしい！もっとよくこの茶器の姿を見てみようじゃないか！ってうわっ！？」

うっかり手を滑らせてしまった。

しかし、持ち前の反射神経を駆使して見事キャッチ。

事なきを得た。

「ふ～…。危ない…。私としたことが焦ってしまった…。というか…」

様子がおかしい政宗。

「というか…。茶器のぶんざいで私を焦らせやがって！ふざけるな！貴様などこうしてやる！！」

バギーン！

政宗は5秒前まで素晴らしいと評価していた茶器を叩き割った…。

一番槍　東北の独眼竜（後書き）

伊達政宗は、素晴らしいと評価した茶器を、「自分を焦らせた」として叩き割った。

勿論自分が手を滑らせただけ。

茶器は悪くない！

凄まじいお殿様ですね…。

こんな感じで史実をちょっとした物語として紹介していきたいと思います。

二番槍　歴史を変えた謀反人（前書き）

今回は明智光秀です。

一応小説なので、登場人物に「キャラ」を付けてみました。

あとがきで、史実について真面目に（？）書いていきます。

二番槍　歴史を変えた謀反人

「みんな集まった？今日は楽しい連歌会だ！」

ここは京の愛宕（あたご）山。

明智光秀主催の連歌会が催されています。

「んじゃ、最初は俺ね！主催者だから！」

光秀は、連歌の第一句を読んだ。

「ときは今　あめが下知る　五月（さつき）かな」

見事な一句。

今日は５月３０日。

今は雨が降っている５月である。

見事。

それに続けと家臣も歌を読んだ。

さて、翌日。

「おみくじ引くぞー！」

張り切る光秀。

「何が出るかな?何が出るかな?っと…」

凶。

「ま、こんなこともあるよね!もう一回!」

家臣は「金魚すくいかっ!」と突っ込みたくなりながらも光秀を見ていた。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「何が出るかな?何が出るかな?よっ…!」

凶。

「…。ままま!稀によくある!もう一度だ!」

家臣も呆れ気味。

ここまで運が悪いやつも見たことない。

光秀はもう一度おみくじを引いた。

「…何が出るかな?…そらっ!」

凶。

家臣が地味に期待していた奇跡をやってのけた。

「…。もう知らない！うわー！」

走ってどっか行ってしまった。

と、思ったら戻ってきた。

涙目で…。

「あのさ、君…。本能寺の堀ってどのくらい深いの？」

光秀が家臣に尋ねた。

「知りませんよ」

サラッと答えた家臣。

「そう…。うわー！」

またどっかに行ってしまった。

因みに、光秀が連歌会を開いたのは本能寺で「アレ」が起きる3日前のことでした。

二番槍　歴史を変えた謀反人（後書き）

本能寺の変の３日前、明智光秀は連歌会を開きました。

会場は京都の愛宕山だったそうです。

連歌っていうのは前の人が読んだ俳句に、次の人が俳句を続けるものです。

その一番最初を任されたのが光秀でした。

光秀は「ときは今　あめが下知る　五月かな」と読んだそうです。

実はこれ、本能寺の変の決意表明だとも取れるんです。

明智家の先祖は「土岐（とき）」という家でした。

それが、「あめが下知る」。

つまり、「天下に命令する」ことだと言われています。

「五月かな」は謎…。

私は知りません。

本能寺の変が６月２日。

連歌会がその３日前なので、ちょうど５月だったからでしょうか？

光秀は、愛宕山でおみくじを３回引いて、全て「凶」だったらしい

です。

逆にミラクル！

さらに、「本能寺の堀はどのくらい深いのだろう…」と呟いたとする資料もあるんです。

因みに、愛宕山で読まれた連歌を収めた資料も現存します。

小説では、泣いてどっか行っちゃいましたが、そんなことはしていません（笑）

伊達と大友以外はそのままで面白い逸話が無くて…。

逆に言うとその2人は話題がつきません。

近々、紹介させていただきます。

三番槍　一番槍の出世頭（前書き）

今回は賤ヶ岳の七本槍のあのお殿様です。

三番槍　一番槍の出世頭

「俺は誰にも背中を見せたことが無い！背中を見せるなど武士の恥！」

そう豪語するのは福島正則。

賤ヶ岳の戦いを始め、数多くの戦で一番槍を担当した勇猛な武将。

一番槍は戦が始まってから真っ先に敵に攻撃すること。

勇気がいる仕事なので高い評価が貰える。

今、そんな福島正則が友人の前でひたすら語っている。

「俺は背中を見せない！この前なんか、戦から撤退するときわざわざ敵の方に体を向けて、背中見せないようにしたんだぜ！」

正則にとって、背中を見せないことは相当な自慢になることらしい。

しかし…。

「うふふ…もう、正則様～…」

「よいではないか！よいではないか！」

福島正則、浮気。

この時は、正則も夢心地だったのだろう。

しかしそれも長くは続かなかった。

浮気後、帰宅した正則を待っていたのは…。

「昌泉院……。あの…それは…？」

昌泉院は正則の奥さん。

ずっと帰りを待っていたらしい。

薙刀を持って…。

「あんた…。浮気してたんだって！？ぶっ殺してやる！覚悟！」

「うわー！待て…！昌泉院…これには訳が…」

「浮気に訳などありません！そりゃあ！」

昌泉院は薙刀を振り回した。

「…う、うわーー！」

この時初めて相手に背中を見せて逃げ出した正則だった。

「俺さ…。この前、初めて背中見せたわ…。女って…怖いものだな…。はぁ…」

三番槍　一番槍の出世頭（後書き）

福島正則は、「敵に背中は見せない」と友人たちに豪語していたらしいです。

戦から撤退するときですら、わざわざ体を後ろ向きにするほどでした。

そんな彼が浮気して家に帰った時の出来事。

玄関を開けると、そこに立っていたのは正則の奥さんである昌泉院。

しかも、手には薙刀。

夫の浮気にブチギレして、正則に切りかかったらしいです。

この時に初めて正則は背中を見せて逃げ出したのでした。

後に、正則は友人に、「この前初めて背中を見せて逃げた。いや、女子（おなご）とは恐ろしいものじゃのう…」と語ったらしいです。

勇猛な武将も、奥さんには勝てませんでした。

結論！

浮気はダメです！

そんなわけで、今回は福島正則のだらしない（？）一面を紹介させて頂きました！

四番槍　東北の独眼竜２（前書き）

今回は奥州筆頭のあの人パート２です。

ひえ～…

怖ろしや～…。

四番槍　東北の独眼竜２

ここは奥州。

今日は楽しい能の見学会！

当然のことながら、奥州のあのお殿様もご出席。

能と言えば日本の伝統芸能！

観阿弥・世阿弥が完成させたアレ！

「それでは、始めさせて頂きます」

そう言って、能は始まった。

その能に見入った奥州の独眼竜、伊達政宗。

無事に、能は終わった。

「いや～！実に素晴らしかった！こんなに素晴らしい能は初めてじゃ！」

興奮気味に語る政宗。

「誠に素晴らしかった！是非もう一度やってはくれぬか！？」

政宗は俳優（能を演じた人）に頼んだ。

「いえ、能は一度しか出来ません」

「…死にたい？」

政宗は刀に手をかけた。

「…。やらせて頂きます」

俳優は、二度目の能を演じた。

四番槍　東北の独眼竜２（後書き）

伊達政宗は、能を見た後に「素晴らしかったのでもう一度見たい」と頼んだ。

すると、「一度だけしかできない」と断られた。

すると、「死にたい？」と能の演じ手に尋ねたらしいです。

能の演じ手はもう一度やって見せたらしいですが…。

恐ろしい男です…。

能の二回目断ったくらいで殺されちゃ命がいくつあっても足りませんわ…。

五番槍　口を滑らせた猿と賢い狸（前書き）

今回はあの２人！

お酒の席には気をつけましょう。

五番槍　口を滑らせた猿と賢い狸

今日は天下のお殿様、豊臣秀吉主催の宴会！
その席に、秀吉の家来の徳川家康も出席した。
既に大分酔いが回っている様子の秀吉。

「あっはっは～！い、家康殿～…」

「何でしょう殿下～！」

家康もご機嫌。

2人の会話の話題は秀吉自慢の大坂城へ。

「殿下は大変素晴らしい天下無敵のお城を持っていらっしゃる！なんて羨ましいことでしょう！」

家康が言った。

事実、堀の深さ、縄張りの大きさ、天守閣の派手さ、守りの硬さのどれをとっても天下一だった。

「いやいや家康殿！あんな城、堀を埋めてしまえば只の裸城。攻略も簡単になってしまうから、最強ではないのだよ～」

秀吉が上機嫌で言った。

「ははは！何を仰いますか！殿下は冗談がお上手で…」

それから数年後。

大坂冬の陣で家康が和睦の条件として持ち出したのは、城の堀を埋めることだった。

そして、夏の陣で豊臣は滅んだ。

五番槍　口を滑らせた猿と賢い狸（後書き）

秀吉は「大坂城は堀を埋めれば簡単に落とせる！」と家康に言ったそうです。

そして家康はそれを実行しました。

実際は、堀を埋めるだけでなく、城の壁壊したりもしたらしいです。

去年秀頼と淀が最期を遂げた蔵の一部が発見されました。

実際にあそこで戦いが…。

と思うとドキドキゾクゾクします。

秀吉時代の大坂城見たいな～…。

因みに、小説内では「大阪」ではなく「大坂」を使わせて頂きました。

誤字じゃありません。

次回も秀吉を予定しています！

六番槍　日本一の出世人（前書き）

今回はあの天下人のあのホトトギス殺す人との出会いです。

諸説あるうちの一つを紹介します。

六番槍　日本一の出世人

ここは駿河は今川領土。

各地を放浪した後、今川家の家臣の松下之綱（まつしたゆきつな）に仕えた男がいた。

木下藤吉郎。

後の豊臣秀吉である。

「ちっ…！何だよあいつ！浪人だったくせしていい気になりやがってよ！」

藤吉郎が優れた人間だったため、周りの之綱の家臣は秀吉が嫌いだった。

「之綱様！藤吉郎のやつ、調子乗ってると思いません？」

家臣の一人が之綱に言った。

「ああ。そうだな。当然今回も出世は…」

「あいつに出世は勿体無いです！」

才能が有りすぎたために、出世コースから外された藤吉郎だった。

そんなある日…。

「おい藤吉郎！尾張まで甲冑買いに行け！」

之綱から藤吉郎に命令が出た。

藤吉郎は逆らわず、尾張まで行った。

「俺はこのまま之綱のもとにいるべきなのか？それとも、尾張には信長とか言うすげー奴もいるって噂だ。いっそのこと…」

考える藤吉郎。

答えはすぐに出た。

「…甲冑代で服を買おう！そして信長に会おう！甲冑代はそのうち返せば問題ない！俺出世してーよ！」

藤吉郎は、甲冑代をくすめた。

「そちが藤吉郎か？」

藤吉郎、只今信長と面会中。

「は、はい！藤吉郎です！」

「ほう…。猿みたいで可愛いな…。採用！」

「ありがとうございます！」

こうして、藤吉郎の新しい道が開け、閉ざされた出世コースも再び開けた。

「くそっ！藤吉郎帰ってこねー！俺の甲冑はどうなるんだよ！」

何も知らない之綱だった。

六番槍　日本一の出世人（後書き）

今回は解説するとこが無いくらい史実だったりします…。

之綱の家臣から嫌われて出世コースから外された秀吉は、甲冑を買いに行くついで（？）に、信長に仕えます。

出世したかったんでしょーねー。

結果大当たりでしたけど。

因みに、甲冑代は返すつもりでいたらしいですよ。

信長が猿顔を気に入ったのも事実です。

ついでに言いますと、今回の出展は「太閤記」です。

そもそも、秀吉が今川家に仕えてたって知ってましたか？

あくまで、諸説あるうちの「太閤記」での話ですけどね。

七番槍　男たちの熱い友情（前書き）

史実過ぎるとつまらないことが判明しました…。

前回のは失敗です～…。

今回のはそれを踏まえて無理やり軌道修正しました…。

出来てない気もするけど…。

今回は有名なあの逸話です！

七番槍　男たちの熱い友情

今日は秀吉主催のお茶会が開催されている。
様々な有力大名たちが秀吉に呼ばれて集まっている。

その中には、大谷吉継の姿もあった。
吉継は、若いころかららい病（ハンセン病）を患っていた。
そのため、大名たちは吉継を気味悪がった。

「さて、ではお茶会を始めようじゃないか！」
秀吉が言った。

秀吉は、自らが立てたお茶を一口飲み、吉継に渡した。

「大谷殿、どうぞ」
「はい。頂きます」
吉継は秀吉から茶受け取った。
そして、口に近づけたその時…。
ポチャン…！

吉継の顔から、茶器の中に膿が落ちてしまった。

気まずい雰囲気が流れる。

「あ…。えっと…。はいっ！」

形式通りに、吉継は隣にいた小西行長に茶器を手渡した。

それを手渡された行長はドン引きした。

「え…。ちょっと…。嫌なんだけど…。え～…」

困る行長。

「仕方ない！飲んだ振り飲んだ振り…」

口を付けた振りをして次の人に渡した。

「ちょっ！これ飲めと…？私も飲んだ振りで…」

「俺も飲んだ振り作戦で…」

その様子を見ていた石田三成。

「よこせっ！」

茶器を奪い取ると、そのまま一気に飲み干した。

「ふあ～！喉が渇いていたので我慢できなかったんだ！美味い！もう一杯頂きたく思います」

「三成…、三成ぃー！」

吉継は泣いて感謝した。

それ以降、三成の為に命を懸けて尽力した吉継だった。

七番槍　男たちの熱い友情（後書き）

吉継と三成の友情物語でした。

因みに、茶器に落ちたのは膿とか鼻水とかいろいろ説があります。

あるいは、ただ口を付けただけとも言われています。

いずれにせよ、他の大名たちはらい病の感染を恐れて口を付けなかったらしいです。

そんな中、三成だけは飲み干したものですから、吉継は心から感謝したんでしょう。

因みに、良い話をぶっ壊すことになりますが…。

三成ではなく、秀吉が気を利かせて飲んだとも言われてたり…。

つまりどっちだか分からない。

なんだかなー…。

でも、三成か秀吉のどちらかが吉継の恩人だったことは事実です！

八番槍　尾張のうつけ革命児（前書き）

今回はあの超有名人！

悲しいお話です…。

八番槍　尾張のうつけ革命児

「行くぞ野郎共！今日は西側を攻めるぜ！」

「おうよ！任せときな！信長！」

ここは尾張の国。

今日も数多の若い不良どもがこの国を駆け回っていた。

この集団を率いていたのは織田信長。

一応、次に尾張を引き継ぐ人間である。

しかし、人は信長を「うつけ」と呼ぶ。

その行動、服装全てが奇抜。

なので、若い不良どもからは人気があった。

現在の尾張は敵だらけ。

そこら中を駆け回るのは自殺行為だった。

「あの…。若殿様…。どうか、その身勝手な行動、慎んで下さいよ…」

苦言をいうのは信長の教育を担当している平手政秀。

「うるさいな…。どうしようと俺の勝手だろう！」

信長が言い返した。

「しかし…。若殿様は次の織田家当主…。身勝手な行動は…」

「いいんだ！俺の好きな用にやらせてくれ！」

信長は、今日も遊びに行ってしまった。

こうなったら…。

政秀は、机に向かって、誰に宛てるでもなく手紙を書いた。

『若殿様の言動が治らないため、教える甲斐がありません…。もう…生きていても仕方がありません…。』

これが、政秀の遺書だった。

書き終えた政秀は静かに腹を切った。

「おい…。嘘だろ！？政秀！政秀ぇ！返事しろよ！おい…政秀！」

信長は、政秀の死をとても悲しんだ。

そして、政秀寺（せいしゅうじ）を建て、政秀を弔った。

八番槍　尾張のうつけ革命児（後書き）

はあ…。
書いてて泣きそうになってしまった…（え？）

さて、実はですね、政秀さんが切腹した理由は諸説ありまして、今回はその一つを紹介させて頂きました。

でも、信長が政秀の死を悲しんだことは疑いようのない事実です。

信長がうつけとして振る舞っていたのは理由がありまして、「敵を油断させるため」や「敵と味方の区別を付けるため」だったと言われています。

九番槍　戦国最強の甲斐の虎（前書き）

あらかじめ…。

見る人によっては不快に思う方もいるかもしれません…。

あの…。

事実…なんですよ?

本当に…。

私とて、こう…。

この小説に関しては、真面目に行こうと思ってたんですよ…。

まあ、あの…。

クレームは無しの方向で…。

九番槍　戦国最強の甲斐の虎

「ちょっと！これはどういうことですか！？」

「いや…その…あの…え～と…だから…」

「誤魔化さないでください！」

「はいぃ…」

ここは甲斐の国。

で、今二人の男が喧嘩中。

攻め寄ってる方が高坂昌信。

攻められてる方が甲斐の主であり、後に戦国最強とも言われる軍を率いる武田信玄その人である。

「いや…その…。お前が一番だよ！だから、ね！怒らないでよ…」

「ふん！よくそんなことが言えたものですね！私はもう知りません！」

「そんな～…」

昌信は、怒ってどこかへ行ってしまった。

そもそもこの喧嘩、信玄が悪いのである。

信玄が、浮気をしたのが原因だった。

相手の名は弥七郎（やしちろう）。

一応言っておくが「男」である。

その浮気に、昌信はキレた。

何故なら、昌信も信玄の「お相手」だったからである。

分かりやすく言うと、前代未聞の「男だけの恋の三角関係」が成立したのだ。

弥七郎に嫉妬して、昌信は信玄に攻め寄っていたのだ。

その晩、信玄は昌信に手紙を書いた。

『お前が一番だよ。冷たくされると悲しいよ！今まで、弥七郎に夜の相手をさせたことは一度も無いんだ！信じてくれ！』

因みに、信玄がこの手紙を書いたのは戦の最中だった。

九番槍　戦国最強の甲斐の虎（後書き）

…。

ごめんなさい！

でも、事実なんです！

その証拠に、あの手紙現存するんですよ！

手紙に書かれていた内容を少し上げてみます。

『一、弥七郎に言い寄ったことは確かにある。しかし、腹痛だと言われて断られた。嘘じゃない。

一、弥七郎に夜伽（夜の相手のことです…）をさせたことは今までに一度もない。昼だろうと夜だろうとそんなことはないし、今夜もない。

一、お前とさらに仲良くなりたいと思っているのに、疑われたのではたまらない。今まで書いたことに嘘があれば、浅間大社など神様方から神罰を受ける覚悟もある』

…。

あの人本当に戦国最強！？

戦場で家臣に浮気の謝罪文書いた武将ってどうでしょう…。

しかも何故現存する…？

因みに、高坂昌信と言えば、「甲陽軍鑑」の作者として知られています。

そして、最後に！

武田信玄ファンの皆様、変な一面だけ紹介してしまい、申し訳ありませんでした…。

あの…。

カッコいい武将だったんですよ？多分…。

十番槍　歴史を変えた謀反人２（前書き）

こんな小説もおかげ様で早くも十話！

読んで頂いた方に心より感謝します！

それと、途中から「～番槍」って付けみました。
カウントし易くなってませんか…？

今回は明智光秀です。

若い頃のお話です。

十番槍　歴史を変えた謀反人２

ある日、友人と二人で某所に出掛けた織田信長の家臣、明智光秀。

その帰り道での出来事。

「お？なんじゃこりゃ？」

光秀は馬を止め、地面に落ちていた木彫りの置物を拾い上げた。

光秀の少し前を走っていた友人が、光秀がいないのに気付き戻ってきた。

「光秀！どこ行ったかと思ったぜ。ん？何だそれ？」

光秀の友人は、光秀が手にした木彫りの置物を指差して聞いた。

「あ～悪い。何か落ちてたんだ」

「拾い食いもいい加減にしないと腹壊すぜ～」

「いや、今回は食い物じゃないし…。ほら！」

光秀は木彫りの置物を友人に手渡した。

友人は馬から降りて、それをよく見てみた。

「おお！これは大黒様じゃん！縁起がいいねぇ！（今、『今回』っ

て言った?前回は拾い食いを?）」

「大黒様?」

光秀が聞き返した。

「そうよ!千人の上に立つえら～い神様なんだよ!縁起がいいから大事にしろよ!」

「ふ～ん…。千人ねぇ…。普通の人間にも千人位なら扱えるってのに…。千人じゃ軍として弱いし…。その程度の神様ならいらんわっ!お前にやるよ!」

「ちょっ…。え～…。（普通拾い物を人に渡す…?）」

友人は仕方無く受け取った。

十番槍　歴史を変えた謀反人２（後書き）

光秀が若い頃のお話でした。

光秀は、大黒様の像を拾いました。

それを友達に見せた所、「それは大黒様と言って、千人の上に立つ有り難い神様だ」と言われたらしいです。

すると光秀は、「千人なら並みの人間でも上に立てる。その程度の神様などいらん」と言って友達にあげたらしいです。

大黒様も光秀にとっては大したものではなかったんですね。

第十話は光秀でした。

因みに、サブタイトルは偉人ごとに決めていく予定です。

ですから、「2、3…」などもあります。

またまだ頑張りますので、よろしくお願いします。

十一番槍　鳴くまで待った狸様（前書き）

今回はあの狸親父です。

ずる賢さが全面に出た逸話となっております。

十一番槍　鳴くまで待った狸様

「おー何だ？やるのか？俺は家康様の家臣だぞ？あ～？たかだか一向宗のぶんざいでよぉ～？」

「んだとぉ～？テメェ、ただじゃおかねぇぞ！」

「はっ！やれるもんならやってみやがれ！」

「やってやるよ！一揆だ！一揆だ！」

ここは三河の国。

家康の家臣と一向宗とのイザコザが起きた。

それをきっかけに、一向宗は家康が嫌いな連中と共に一揆を起こした。

「家康様！我らが有利にございます！あとは奴らが籠城する寺を落とせば我らが勝利！」

家臣が家康に報告した。

「よしっ！そうか！ならばもう大丈夫だな…」

少し安心した家康だったが…。

そこに、家臣がやってきた。

「報告！一向宗より和睦の申し出が！『寺は以前と同じようにする』というのが和睦の条件だと…」

「な…。不利なのは貴様らではないか！その様な条件、決して飲めん！」

家康が言うことはもっともだった。

暫くすると再び家臣がやってきた。

「報告！織田信長様より、早く戦を終わらせろとの主旨のお手紙が！」

それを聞いて困った家康。

「ぬぅ～…。戦の勝利は目前…。しかし信長殿の命令とあっては逆らえん…。仕方ない！和睦じゃ！」

家康は、相手の有利な条件で和睦した。

しかし…。

「寺をぶっ壊せ！」

それが家康からの命令だった。

「なっ…！何すんだ！寺を以前のようにするのが和睦の条件じゃな

いか！約束を破る気か！？」

一向宗から文句がでた。

「ほう…。以前…ねぇ。寺が建つ以前は野原だったんだから、その通りにしたまでだよ！」

「くそっ…。狸めが…」

一向宗は悔しがった。

十一番槍　鳴くまで待った狸様（後書き）

家康の家臣がおこしたイザコザで、一揆が起きた。

（イザコザの詳細は知りません…）

一向宗＆家康嫌い組対徳川軍の戦いが始まった。

激戦の末に寺に追い詰められた一向宗。

そこで、和睦を求めた。

一向宗にとって寺は大切な場所だったのでしょう。

条件は「寺は以前のようにすること」だった。

つまり、寺には手を出すな、ということだった。

家康は、信長から早く戦を終わらせろという指示を受けていたので、この条件を飲んだ。

しかし、戦が終わると家康は、寺を破壊した。

家康曰わく、「寺が建つ以前の野原に戻した」。

屁理屈でしょ！

家康は忍耐力だけでなく、ずる賢さもずば抜けていたのかも知れませんね。

そうでもないと天下は取れないのかな…？

というわけで、家康の屁理屈な逸話でした。

十二番槍　江戸城の築城主（前書き）

シモンチェリ選手のご冥福をお祈りします。
あっちでも、加藤大治郎選手と共に、走り続けて下さい！

さて、今回は江戸城を築いたあのお殿様！
家康じゃないです。
家康は改築しただけですよ？

全国的な知名度は低いかもですが、埼玉県内なら…戦国ファンの方は知ってるかもです！

十二番槍　江戸城の築城主

ここは武蔵の国。

一人の幼き天才がいた。

名は太田道灌（おおたどうかん）。

禅寺や足利学校で勉強していた道灌は、読み書きがとても良くできたのである。

「道灌…。お前、大丈夫か？」

そう声をかけたのは道灌の父、道真（どうしん）。

道灌が早熟なのを心配していた。

「いいから道灌！昔から頭のいい人間にはろくなのがいないんだ！人は正直じゃなきゃいけないんだぞ？わかるか？道灌よ！障子を見ろ！真っ直ぐだから立つんだ！曲がってると立たないもんだぞ！」

すると、道灌は…。

「屏風は曲がってるから立つんだよ？父ちゃん！」

屏風を指差して言った。

「……トイレ言ってくる　…」

道真は戻ってこなかった。

屏風事件から暫く経ったある日…。

「これをお前にやろう！いつもこの言葉を意識しろ！」

道真は「おごれる者久しからず」と、平家物語の一部を紙に書いて道灌に渡した。

すると道灌は即座に「おごらざる者もまた久しからず」と書き換えた。

「んだこの野郎！せっかく書いてやったのによう！」

道真はキレて、道灌を扇で何度も叩いた。

「だって…だってぇ～！」

「だってじゃない！喰らえ！」

「うぎゃー！」

道灌の叫び声は暫く続いた。

十二番槍　江戸城の築城主（後書き）

武蔵の国の戦国武将、太田道灌。

江戸城の築城主として有名（？）です。

彼は屁理屈が得意だったんでしょうね！

父の道真に「障子は真っ直ぐだから立つ！曲がっていたら立たない！」と言われると、屏風を持ってきて、「屏風は曲がっているから立つんだ！」と言ったらしいです。

道真は何も言い返せなかったらしいですよ…。

また、「おごれる者久しからず」と書いて道灌に渡したところ、「おごらざる者もまた久しからず」と書き換えたらしいです。

意味は、「権力が無く調子に乗れない者もまた長くない」となるんでしょうか。

とにかく、彼は屁理屈が得意な頭が切れる戦国武将だったようです。

十三番槍　九州筆頭のキリシタン殿様（前書き）

九州のキリシタン大名と言えばあの人！

史実そのままがネタになる、最強の切り札的なお殿様です。

十三番槍　九州筆頭のキリシタン殿様

「何!?美女!?よし!すぐに呼べ!」

「えっ?し、しかし…。関東の女子(おなご)なのですが…」

「構わん!呼べ!」

「というか…。旦那もいるのですが…」

「知るか!呼べ!これは命令だ!従わぬなら斬る!」

「し、承知!」

ここは九州、豊後の国。
大友館。

そして、この無類の女好きのお殿様は大友宗麟(おおともそうりん)。
九州のキリシタン大名の筆頭である。

今日も、女遊びを終えて城に帰った宗麟。
彼を待っていたのは、妻の奈多(なた)夫人だった。

「いつもいつもいつも知らない女と遊びやがって!もうこちらも黙ってはいませんわ!今日、国中の僧侶と山伏に、

あなたを呪い殺せと命令しました。今更反省しても遅すぎますわ！」

元々気の強かった奈多夫人。

ついに、宗麟の行いに耐えきれなくなった故の行動だった。

「ちょっ！嘘…。い、いやー！イエス様ー！お助けー！」

そう叫びながら宗麟は城を飛び出した。

そして宗麟失踪。

しかしその3日後、家臣が城の外れにあるあばら小屋で宗麟を発見した。

「ほら、殿！お城に帰りましょうよ！」

家臣が宗麟の腕を引っ張りながら言った。

当然呆れている家臣。

「嫌じゃ嫌じゃ！城には奈多がいるから嫌じゃ！」

ひたすら拒否する宗麟。

「…はぁ…。じゃあ、臼杵城に行きますか…？ここにいても仕方ないですし…」

「うん…」

こうして、宗麟は拠点を移すことになった。

十三番槍　九州筆頭のキリシタン殿様（後書き）

大友宗麟は女癖の悪さが尋常ではなかったのですよ。

「美女」と聞いた瞬間、畿内や関東から呼び寄せまくったり。

一応言いますが、九州にですよ？

移動手段は馬や籠ですよ？

極めつけは、家臣の妻を奪い取ったり。

そんなだから、妻とは仲が極めて悪かったらしいです。

どのくらいかと言うと、祈祷僧や山伏なんかに「夫を呪い殺せ」と命令するほど。

薙刀を使わなかっただけ拍手ですよ！

で、そんなことがあったから宗麟は拠点の大友館から失踪したんです。

呪い殺されちゃ堪んないと。

暫くすると、宗麟は、あばら小屋て発見されました。

しかし、「あの館には奈多がいるから帰りたくない」と、大友館に帰ることを頑なに拒否。

仕方なく、宗麟の家臣が建てた、臼杵城に連れて行かれたのでした。

因みに、宗麟が臼杵城に拠点を移した表向きの理由は、「毛利水軍に対抗するため」でした。

実際は奈多さんから逃げたかっただけでしょうけどね～。

まあ、確かに毛利水軍は強いけど…。

というか…。

宗麟って何なの!?

どこまで女好きだとこうなるの!?

このままだと宗麟ファンの方に怒られそうなので彼の名誉挽回の為に一つ良い面も。

日本で最初に大砲を導入したのは宗麟です。

国土をも崩す威力があると言う意味で、「国崩し」という名前でした。

一応、強かったんですよ?

大友軍。

頭首がアレなだけで…。

十四番槍　兄弟たるもの支え合え！（前書き）

今回は有名な逸話です。

というか…偽話（いつわ）…？

あとがきがメインかも…。

十四番槍　兄弟たるもの支え合え！

「毛利両川完成！これで毛利家も安泰だ！」

こちらのお殿様は毛利元就。

毛利家安泰のために全力を注いだ、知略を駆使した戦国武将。

「おーい！隆元！元春！隆景！ちょっと来い！」

元就は、自分の３人の息子たちを呼び寄せた。

毛利隆元・吉川元春・小早川隆景の３人である。

元春は吉川家、隆景は小早川家の養子として後継ぎとなっている。

「いいか！この先お前たちは決して争ってはならん！いつでも兄弟として支え合い、協力するのだ！」

元就が息子たちに言った。

はいっ！と返事をした息子たち。

そして、元就は話を続けた。

「ここに一本矢がある。これはお前たち一人一人だ。だが…この矢は…簡単に…！ふんっ！あれ？ふんっ！」

バギッ！
元就は矢を折ってみせた。

「はぁ、はぁ…。か、簡単…に…折れ…折れてしまう…」

元就息切れ中。

5分後…。

「ふう…。もう大丈夫だ。話の途中だったな。一本の矢は折れやすい。だが…三本合わせると、頑丈になり折れなくなる！お前たちもこの矢のように3人合わさって協力していくのだ！」

「はいっ！（あれ？一本でも折れにくかった…？）」

3人同時に返事をした。

「でも、三本も矢使ったら三倍早く矢が尽きちゃう…」

「あぁ？おい隆景、何か言ったか？」

「ひぃ～！な、何でもないです！」

元就の息子3人は決して争うようなことはしなかった。

十四番槍　兄弟たるもの支え合え！（後書き）

毛利元就の「三矢の訓（さんしのおしえ）」でした。

一本の矢は弱くもろいが、三本合わせると強い頑丈な矢になる。

っていうあれですね。

しかしですね、これ。

毛利家の史料のどこ探しても出て来ません。

早い話が作り話なんです。

イソップ童話や中国の故事に似たようなものが出てます。

多分、それが元ネタになってるんだと思います。

さらに、江戸時代に流行った朱子学。

これが教訓を作るのが得意だったらしいです。

で、日本で三矢の訓が当てはめられる丁度いい人が元就だった。

そんな感じでしょうかね？

簡単に言うと、「兄弟仲良くしなさいよ」と言うことを教訓としたい。

そのために何か具体例が欲しい。

よし！三矢の訓だ！元就だ！

みたいな感じ。

まあ、結果として毛利・吉川・小早川は争いませんでしたし。

教訓にするには持ってこいだったんでしょうね～。

因みに、本文の最後の「三倍早く矢が尽きる」は「妖精大戦争」でのスターの台詞なんですが…。

恐らく、この小説を読んで頂いている独身者様の中に東方好きな方はいらっしゃらないですよね…。

場違いなネタでした…。

一の太刀　もしもあの時…（前書き）

今回は特別番です。

もしも関ヶ原の戦いが長引いていたら…について考えて見ました。

興味無ければスルーの方向で…。

あくまで、私一人の考えです。

可能性の一つくらいに見てください。

ご意見いただけると嬉しいです。

一の太刀　もしもあの時…

もしも、関ヶ原の戦いが長引いたら…。

１６００年関ヶ原。

史実では6時間ほどで決着が付いた天下分け目の戦い。

しかし、もしも小早川が裏切らなかったら…。

戦いは数カ月に及び、泥沼化していただろう。

泥沼化した状態から東軍が勝利したとしたら、家康は江戸に幕府を開いただろうか？

もし西軍が勝っていたら、首都は大阪だったのだろうか？

恐らくだが、どちらも正しくないだろう。

関ヶ原が泥沼化した。

小早川が裏切らずに西軍が勝利した。

どちらの状態でも東軍、西軍共にボロボロである。

実際、そうなることを予想して天下を狙った男もいた程だ。

黒田勘兵衛。
九州の天才軍師である。

関ヶ原が泥沼化すると読んだ彼は、大友軍に勝利し、兵力を強化していった。

史実では、関ヶ原がすぐに終わってしまい、家康に軍を解散させられたが…。

関ヶ原の戦いが長引いていれば、勘兵衛が天下を取っていたと思われる。

そうなったら、日本の首都は九州で、キリスト教も弾圧せず、鎖国もしなかっただろう。

大きく歴史は変わっていたかも知れない。

そんな意味でも、関ヶ原の戦いは「天下分け目の戦い」だったのである。

一の太刀　もしもあの時…（後書き）

歴史の「もしも」って難しいです…。
正解がないので…。

次回からまた普通に逸話書きます～。

「もしもあの時」は逸話が思いつかなかったり気分が乗ったときに不定期で書いていきたいと思います。

興味無ければスルーしてくださいな。

ご意見頂きたく思います。

「いやいや、ここはこうじゃなくてこうなったんじゃね？」みたいな意見とか…。

待ってます～。

因みに、回数のカウントは「〇の太刀」です。

十五番槍　蝮の娘様（前書き）

初の姫様が主役です。

戦国時代に活躍した女性って結構少ないので逸話探すのもひと苦労した記憶が…。

十五番槍　蝮の娘様

「…さぁ、可愛い帰蝶よ…。旅立ちの時間じゃ。尾張の国で幸せになるんじゃぞ！」

美濃の国のお殿様、斎藤道三はそう言って娘の頭を撫でた。

「もう、お父様ったら！私は尾張の信長様の下で幸せになりますってば！」

道三の愛娘、帰蝶は道三にそう言った。

今、帰蝶は尾張の織田信長のもとに嫁ごうとしている。

そうなると、名は美濃から来た姫という意味の「濃姫」となる。

完全に斎藤家を出ることになるのだ。

「うう…。帰蝶よ…。儂からの嫁入り道具じゃ。受け取ってほしい…」

道三が手渡した物は…。

「…刀…ですか？尾張にも包丁くらいはあると思いますよ？それに料理は侍女に作らせれば…」

「違う！帰蝶…。信長という男が噂通りのうつけならば、その刀で殺してしまうのじゃ！良いな？」

道三が言った。

それを聞いた帰蝶は、刀を道三に向けた。

「…ふふっ。でもこの刀、いずれお父様を斬るものになるかも知れませんわよ！」

「ははははっ！それでこそこの蝮の娘じゃ！天晴れ！達者でな！濃姫よ！」

「はいっ！お父様！私、濃姫として幸せになります！」

帰蝶はゆっくりと美濃の地を後にした。

十五番槍　蝮の娘様（後書き）

濃姫が１０歳頃の時のお話でした。

濃姫（帰蝶）は信長に嫁ぐことになりました。

政略結婚だったと思います。

嫁いで行く濃姫に道三は刀を渡しました。

刀って言っても小さいやつですよ。

道三は「信長が本当に噂通りのうつけならその刀で斬り殺せ」と濃姫に言ったそうです。

すると濃姫は「この刀はお父様を斬ることになるかも知れません」と言ったそうです。

１０歳の女子が言うことじゃないよ！

その若さで世の中の動きを既に見抜いていたのでしょうか…？

とにかく、凄い女性だったんですよ、濃姫は。

賢かったんですね。

これを聞いた道三は、濃姫を誉めたらしいですよ。

「流石は蝮の娘！」って。

心が広いというか何というか…。

因みに、濃姫の名前が「帰蝶」なのは、有力な説であって確定ではなかったと思います。

二の太刀　～戦国逸話小ネタ集～（前書き）

小説としては使いにくい逸話を集めて見ました。

第一回目は豊臣秀吉です。

ほぼ箇条書きですけど、せっかくの逸話なので…。

二の太刀　～戦国逸話小ネタ集～

豊臣秀吉

秀吉とおねの結婚は戦国時代にしては珍しく、恋愛結婚だった。
因みに、親には反対されたそうです。

秀吉の右手には指が六本あった。
ルイス・フロイスや前田利家がそう書いてます。

肖像画の髭は付け髭だった。
当時は髭が無いのはとても恥ずかしいことだった。
喧嘩で「この髭無しがっ！」と言われた北条の家臣が相手を斬り殺した記録もあります。

ニックネームは「猿」ではなく「禿鼠」だったらしい。
「猿」は信長がおねに宛てた手紙の中に「あの猿は元気か？」みたいなことが書かれているくらい。

二の太刀　～戦国逸話小ネタ集～（後書き）

小ネタでした。

解説は特にありません。

本文通りです。

２００文字埋めるのに苦労しました…。

十六番槍　三顧の例に応えた軍師（前書き）

週刊ランキングの歴史部門で9位でした！
週刊に入ったのは初めてです。
有難う御座います！

さて、今回はあの軍師！
城の乗っ取りと言えば？

十六番槍　三顧の例に応えた軍師

「おいこら義龍！貴様息子の癖して父に刃向かうとは何事だ！親の顔が見てみたいわ！」

「んだとオラァ！テメェのようなクソジジイ、父親だと思ったこともないわ！親の顔が見たけりゃ、鏡見な！」

ここは美濃。

斎藤道三が息子の義龍と争っていた。

国が荒れているそんな中、母や弟と菩提山城で父の帰りを待っている少年がいた。

色白で女性らしさもどこかに存在する彼の名は、竹中半兵衛。

彼の父、重元（しげちか）は、道三の味方として出陣していた。

子供と女しかいない城は、義龍側から見ればこれ以上無い獲物だった。

「おいっ！今なら菩提山城は女子供しかいないらしい！城一つ落としたとなれば、義龍様から謝礼がたんまり出るぞ！」

「マジで？チャンスじゃん！よーし！やってやんよ！」

案の定、義龍の味方の土豪たちが攻撃してきた。

「へーい！竹中のガキ共！殺されたくなけりゃ、城空けな！テメェらの親父も兵も出陣してんのは知ってんだ！足掻くだけ無駄だ！」

攻撃しながら土豪は叫んだ。

その声に怯えたのは城内の半兵衛の弟や母。

「あわわわわ…。は、半兵衛や。し、城を…城を空けないと…」

「そうだよ兄様！今は俺達3人しかいないし…。殺されたら元も子も無いよ！」

母と弟は半兵衛に泣きついた。

しかし、半兵衛はいたって冷静だった。

「ふぅ…。母上様、そして弟よ…。城中の竹を集めてくれ…」

そういうと、半兵衛は焚き火をおこした。

「竹をこの火に投げ入れて！急いで！」

半兵衛が指示した。

ポカンとする二人。

それでも半兵衛に従うしかなかった。

「そりゃ！んしょ！兄様！入れたよ！」

「もっと！もっと入れて！」

パンッ！バンッ！

火にくべられた竹は勢いよく破裂した。

勿論、大きな音を伴って。

その音を聞いてビビったのは土豪たちであった。

「うわぁ！こ、この音…。鉄砲じゃねえか？」

「あ、ああ…。間違いねぇ…。て、鉄砲だぁ！まだ城にそんなものが残ってたのかっ！」

「うわぁ！撤退！撤退じゃあ！」

土豪は慌てて撤退した。

こうして、半兵衛たちは事なきを得た。

十六番槍　三顧の例に応えた軍師（後書き）

竹中半兵衛が１３歳の時でした。

１０歳の弟や母と城の留守を守っていると土豪に襲われました。

しかし、半兵衛は全く動じず、火に竹を入れるように指示。

竹の破裂音を鉄砲の音と勘違いした土豪は慌てて逃げ出したそうです。

後に天才軍師と呼ばれる半兵衛の才能が早くも開花したエピソードでした。

十七番槍　東北の独眼竜３（前書き）

今回もあの方を特集します。

いやぁ、ネタが入って来ないときの独眼竜！

十七番槍　東北の独眼竜３

よく晴れた昼下がり。

暖かな陽気が気持ち良い休日。

昼寝がしたくなるのは、お殿様も同じのようで…。

「ふぁあ～…。一眠りするかな…」

ここ奥州のお殿様、伊達政宗もお昼寝中。

暫くすると、天気が崩れて雨が降ってきた。

それに気付いた政宗の家臣。

「ああ！雨だ！政宗様がお風邪を引いたら大変だ！」

気を利かせて政宗を起こした。

「政宗様！雨です。お体が冷えてしまいますよ。暖かい場所にお布団を敷き直しますね」

すると政宗は起き上がった。

その手には日本刀が…！

それを見た家臣は一目散に逃げ出した。

「うあぁー！ま、政宗様！？」

「待て！おい待て！」

追ってくる政宗。

ついに家臣は追い詰められてしまった。

「はぁ…はぁ…。人がわざわざ気を利かせて起こして差し上げたというのに…！私を殺すというのなら…！いっそ！」

家臣は刀に手を掛けた。

「はぁ…はぁ…。おい…。何で逃げるんだよ…。気を利かせてもらったから、お礼にこの刀をあげようと思ったのに…」

家臣の誤解は解けた。

十七番槍　東北の独眼竜３（後書き）

伊達政宗が昼寝をしていると、雨が降ってきました。

そこで、気を利かせた家臣が政宗を起こしました。

すると、政宗は刀を手に家臣を追いかけ始めました。

追い詰められた家臣は政宗と差し違える覚悟で、「何故追って来たのですか?」と聞いたそうです。

政宗は、「お前こそ褒美にこの刀をあげようと思ったのに何故逃げるんだ!」と言ったそうです。

そりゃ逃げるよ!

起こしただけで追いかけられるのはゴメンですね…。

そして安定しないあとがきの書き方…。

十八番槍　天下のただ飯喰らい（前書き）

今回は「穀蔵院ひょっと斎（天下のただ飯喰らい）」と自ら名乗ったあのお方！

私はこの方大好きです（笑）

十八番槍　天下のただ飯喰らい

「どうしてお前はいつもいつも人の話を聞かないんだ！いい加減にしろ！」

「…また怒られた…。ちぇっ！つまんねーの！」

先ほどまで叱られていたこの男。

前田慶次。

この加賀の国を治める前田家の人間である。

その言動、行動、全てが変わっていることで加賀では有名だった。

そのことが原因で、加賀の殿の前田利家にはしょっちゅう怒られていた。

「つまんねー！どんなに広い土地があったって、自由に生きれなきゃそこらの浪人と同じなのにな～…。だったら…！」

慶次は前田家を出ることを決心した。

「いや、待てよ…。ただ家を出ても面白くないな～。最後くらいあのうるさい利家に仕返ししてやりたいな！」

慶次は密かに計画を立てた。

そして、ついに計画の実行日。

慶次郎は利家に手紙を書いた。

「今までの行動、申し訳ありませんでした。反省しますので、その印に茶会をします。是非来てください」

それを見た利家は喜んだ。

「おい！慶次が改心したぞ！これは茶会に行かなければ！松風を出せ！」

利家は、愛馬「松風」に乗り、慶次のもとへ。

「よく来ましたね！本日はとても寒いので、茶会の前にお風呂を用意しました」

慶次が利家に言った。

「気が利くな！それでこそ前田の男！」

利家は風呂に飛び込んだ。

しかし…。

「ギャー！うわっ！あー！み、水風呂じゃないか！あの野郎！絶対

に慶次を逃がすな！」

利家は水風呂が沸くかと思うくらい怒った。

しかし、その怒りの矛先は、既に城からは逃げ去っていた。

松風と共に…。

十八番槍　天下のただ飯喰らい（後書き）

前田慶次でした。

前田慶次郎ともいうらしいですね。

前書き&題名の「穀蔵院ひょっと斎（天下のただ飯喰らい）」は、慶次が秀吉に面会した時に名乗った名前（？）だそうです。

今回は慶次の悪戯についての逸話でした。

「茶会を開く」と言って利家を呼び出した慶次。

それを「心を入れ替えた」と喜んだ利家でした。

しかし、全ては慶次の思惑通り。

「寒いのでお風呂を沸かしました」と利家を風呂に入れました。

しかし、その風呂は水風呂でした。

勿論、利家はブチギレたそうです。

因みにこの時慶次５８歳。

もういい歳ですよ。

悪戯小僧ほど恐ろしいものは無いね…。

こうして、慶次は利家に一泡吹かせることに成功したのでした。

利家の愛馬の松風は慶次に盗まれたそうです。

この度胸に拍手ですよ…。

十九番槍　四国の姫若子（前書き）

ここに来てやっと1万文字超えです（笑）

最近、登場する武将のキャラが弱い気がする…。

あとがきで解説するので、ある程度は崩しても大丈夫でしょうか？

さて、今回の舞台は四国です～！

サブタイトルの姫若子は「ひめわこ」と読みます。

十九番槍　四国の姫若子

「元親よ！今度の長浜の戦い、お前も出よ！」

長宗我部国親（ちょうそかべくにちか）から息子の元親に命令が下った。

「え～？俺？読書してたい…。第一、戦なんてやったことないし…」

元親が言った。

「２２歳で未だに戦に出たことないのなんて、お前くらいだ！そんなだから姫若子（ひめわこ）などと呼ばれるんだ！いいから来い！さもなくば、家督はお前に譲らん！」

「え～…」

元親が出陣することは、直ぐに家臣たちにも伝わった。

「姫若子が出んの？」

「マジで？うわ～。絶対役に立たねーよ！」

色が白く、読書ばかりして大人しかった元親。

全く期待されていなかった。

いざ、決戦日。

戦いは、土佐の長浜城で行われた。

出陣の前に、元親は家臣を呼んで幾つか質問した。

「ねぇねぇ！槍ってどう使うの？」

その質問に言葉を無くした家臣。

ただただ飽きれるしかなかった。

「……。じゃあ、相手の目を狙ってください。それだけでいいですよ…」

「分かった！もう一つ聞く！大将は先に行くものなの？それとも後から行くの？」

「……はぁ…。大将は大切なお人。先に行ってはいけません…」

「分かった！じゃ、戦に行ってくる！」

戦が始まった。

元親は最前線にいた。

「おら！おら！おら！かかって来いや雑魚が！」

元親は強かった。

戦が終わると、敵の首を2つ持って帰ってきた。

そこで、家臣がきいてみた。

「何で?何で強いのを隠していたんですか!?」

「あはは!戦は騙し合いよ!敵を騙すにはまず味方からってね!」

姫若子が、鬼に化けた瞬間だった。

十九番槍　四国の姫若子（後書き）

長宗我部元親の初陣は遅く、２２歳と言われています。

夜襲で長宗我部国親に奪われた長浜城を取り返しにきた本山茂辰（もとやましげとき）との戦いでした。

長浜の戦いといいます。

この時に元親が被った兜が現存します。

元親は色が白く、本ばかり読んでいて大人しかったため「姫若子」と呼ばれていました。

初陣の時には、槍の使い方や大将の振る舞い方を聞いて、家臣をガッカリさせました。

しかし、いざ戦が始まると、最前線で奮闘し、数人の敵を倒したそうです。

これで長宗我部軍の士気はマックスに！

結果圧勝しました。

姫若子がやりよった！

家臣に色々聞いたのは、本で読んだ知識を確かめたかったかららしいです。

元親が何も知らないバカを演じたのは、騙すため。

敵も味方も騙しました。

「何故今まで大将の器を隠してたのさ?」と家臣に聞かれると、「戦とは騙し合いである!」と答えたらしいです。

因みに元親のこの言葉は孫子の兵法書の言葉らしいですよ。

いかにも本好きの元親らしい!

やっぱり知識がある人は強いのかね〜…。

いつの時代も。

以上!元親でした!

どこか分かりにくい場所があったら遠慮無く言ってくださいね…?

史実を崩して書くのって地味に難しいので、何か分かりにくい部分があるかも…。

三の太刀　日の本のお姫様（前書き）

前回のを予約投稿にし忘れた関係で、次の日分のストックが無くなり、急遽書いたものです。

「〇の太刀」シリーズ第三回目です。

このシリーズは、本編では扱いきれないようなネタを紹介します。

小説っぽさは０です。

興味無ければスルーで…。

今回は戦国時代を生きた女性に注目しました。

三の太刀　日の本のお姫様

戦国時代。

それは、男たちが夢をぶつけ合ったまさに男のための時代である。

そんな時代に、男たちを支えた姫様もいたのである。

おね

恋愛結婚で、両親には反対されながらも秀吉と結婚した。

以後、秀吉が天下を取り、自身が８３歳で永眠するまで生涯秀吉のために生きた女性。

しかし、結婚したてのおねは、秀吉にある約束を守らせていた。

「もし秀吉が尾根に口答えしたら一昼夜縛り上げて良い」

秀吉は、尻に敷かれていた…。

大祝鶴姫（おおほうりつるひめ）

大内義隆との戦いで出陣した少女。

しかし、この戦いで兄と恋人が討ち死に。

鶴姫は最後の反撃をして大内軍を撃破した。

しかし、その後兄と恋人を失った悲しみに耐えられずに１８歳で海に身を…。

「わが恋は　三島の浦の　うつせ貝　むなしくなりて　名をぞわづらふ…」

細川ガラシャ

細川忠興の妻。

父親が明智光秀で、本能寺の変が起きて人生が変わり果ててしまった。

忠興に幽閉されながらも、キリスト教だけを心の支えに生きた。

関ヶ原の戦いで、三成に人質として捕まりそうになったとき、細川家の為に死ぬことを決意。

キリスト教では自殺が禁じられているので、家臣に討たれる形で最期を迎えた。

戦国時代は、女性たちが影で活躍した時代でもあった。

三の太刀　日の本のお姫様（後書き）

おね。
または北政所。

天下人、豊臣秀吉を支えた女性でした。

生涯子宝に恵まれなかったらしいです。

ただ、一説によると、妊娠はしたが秀吉が「時期でない」みたいな理由をつけてお灸を添えて流産させてたとか。

それが原因で子宝に恵まれなかったみたいな説を聞いたことがあります。

逆に、前田利家の妻のまつは１１人子供がいて、多いことで有名です。

１人目産んだの１４歳だし…。
因みに結婚したのは１２歳。
利家は２４歳でした。

今では考えられないです…。

大祝鶴姫。

戦った女性。

１６歳ですでに出陣してたんでしたっけ。

いまいち情報が少なくてすいません…。

因みに、鶴姫の甲冑は現存する唯一の女性用の甲冑です。

胸の辺りが膨らんでいて、お腹の辺りが細くなってるらしいです。

スタイル良かったのかな…？

細川ガラシャ。

キリスト教に生きた女性。

様々な不幸にも負けずに頑張った女性ですね。

辞世の句は「散りぬべき　時知りてこそ　世の中の　花も花なれ　人も人なれ」

散る時を知っているからこと花は美しい。私もそうありたい。

夫の忠興についてはまた別の機会に紹介します。

すんごいから！

以上！急遽書いた三の太刀でした。

本当は今頃この小説の代わりに長宗我部のお話が投稿される予定だったのに…。

今日投稿するぶんの小説が無くなっちゃったから…。

二十番槍　戦国最強の絆（前書き）

今回は有名な逸話です。

ライバルの二人の絆が垣間見えますよ～！

二十番槍　戦国最強の絆

「今川如き、この信玄の敵にあらず！」

武田信玄が、今川氏真（いまがわうじざね）を攻撃した。

「ちっ！何だよあいつ！ちょっと北条さん！」

氏真は北条氏康（ほうじょううじやす）を呼んだ。

「ほえ？な～に？氏真ちゃん？」

「北条さん！最近、武田信玄が攻撃してくんのよ！信玄のことどう思う？」

氏真がきいた。

「ぶっちゃけ、超キライ！ウザイ！」

「だよね～。じゃあ、塩止めする？」

「いいね～氏真ちゃん！」

こうして、今川と北条は協力して、甲斐に塩が行かないようにした。

「塩～。塩が欲しい…。塩化ナトリウム～。ＮａＣｌ～…」

海が無い甲斐の人々は苦しんだ。

それを知った越後の上杉謙信。

「今川に北条…。なんて卑怯な！戦では勝てないからこんなことするんだ！私は戦で虎と雌雄を決する！塩を用意せよ！武田を助けるのだ！」

そう言って、甲斐に大量の塩を送った。

「なんと…長尾が…！？信じられん…」

知らせを聞いた信玄は喜んだ。

「味方に…味方に欲しい名将ですね！」

信玄の家臣もとても喜んだ。

「長尾に…この塩留めの太刀を…。お礼をするのじゃ！」

「はい！」

信玄は謙信に太刀を送った。

こうして、甲斐は塩不足から脱したのだった。

二十番槍　戦国最強の絆（後書き）

「敵に塩を送る」の逸話でした。

今川と北条が協力して塩止めして、信玄は窮地に立たされました。

そこを救ったのが川中島の戦いで何度も戦をしている信玄のライバル、上杉謙信でした。

謙信は「弓矢では勝てないから卑怯なことをしているんだ！私は戦で信玄と決着をつける！」と言って大量の塩を信玄に送ったそうです。

信玄は「味方に欲しい名将」と言ったらしいです。

…通説では。

実はこの逸話、嘘だと言われています。

謙信が塩を送ったのは、ただの商売のためとか…。

昔から甲斐と越後の間には、塩のやりとりがあって、それを止めなかっただけらしいですよ。

しかし、いずれにせよ、塩を止めて信玄に追い討ちを掛けなかったのは事実！

というか、信玄が塩をもらったお礼として謙信に送ったとされる「

塩留めの太刀」が現存します。

ホントに嘘なの…？

因みに、信玄は謙信が関東管領を貰い「上杉」を名乗っていたことが嫌で、「長尾」と旧姓で呼び続けたらしいです。

私は「塩留めの太刀」の存在からこの逸話信じてるんですけど…。

皆さんはどうでしょう？

二十一番槍　独眼竜の懐刀（前書き）

伊達政宗の懐刀です！
某スタイリッシュ英雄アクションゲーム的に言うと…「竜の右目」…？

二十一番槍　独眼竜の懐刀

「うわぁあー！右目！右目がぁ！」

今でこそ奥州を治める独眼竜伊達政宗だが、小さい頃患った天然痘の毒が右目に回り、失明した。

それから数年後…。

立派に成長した彼の右目に異変が起きた。

「殿、その右目、最近飛び出して来ましたな。見えないのなら必要ないのでは？」

独眼竜の懐刀と言える存在の、片倉景綱が言った。

天然痘を患って以来、光を失った政宗の右目が飛び出してきたのだ。

「ん～。そうだな。天然痘のせいだろう…。両目見えれば天下も簡単に取れたろうに…」

「その目なのですが、戦で敵に掴まれたらどうするつもりですか？」

「…ほう。よし！小十朗！取れ！」

「ははっ！」

小十朗…すなわち、片倉景綱は静かに動じた様子もなく腰から短刀

を取り出した…。

二十一番槍　独眼竜の懐刀（後書き）

片倉（小十朗）景綱は、初代「小十朗」ですね。

天然痘の影響で飛び出してきた伊達政宗の右目を切り取ったのは景綱らしいです。

ただ、政宗が自分で目に短刀を刺したっていうのと、政宗が景綱に取れと命令したというのとがありまして、どっちが正解かわかりません。

しかし、右目の切除に景綱が関わったことは間違いなさそうです。

本文ではですね、そのまま書くと「残酷な描写あり」タグ貼らなきゃいけなくなりそうだったので、途中で切りました。

中途半端でスイマセン…。

度胸あるお人だったんですね、片倉景綱は。

皆さんは、小十朗と景綱どっちで呼ぶ派ですか？

二十二番槍　鳴くまで待った狸様２（前書き）

今回はあの方が自分の腕を信用し過ぎたために起きた事件です。

二十二番槍　鳴くまで待った狸様２

「よしできた！これが紫雪（しっせつ）よ！すんごい効き目の風邪薬よ！」

江戸城のとある部屋。

ここで今まさに調合したての薬を手にとり、満面の笑みを浮かべる老人がいた。

すでに将軍の位を譲って大御所となっている彼の名は、徳川家康。

趣味は薬の調合。

「次は何を作ろうかな～？万病円にしよう！」

そう言って、新しい薬を作り始めた。

それからしばらくたった…。

薬のレパートリーも増えたある日…。

「おー！これが、タイの天ぷらかー！美味い！美味すぎる！」

しかし…。

グリュリュリュ～…。

「腹が…痛い…。い、医者を呼べ～…。それから…万病円を…。あれは食中りに効くんじゃ…。あと…わしの最新作…銀液丹も…持ってこい…！あれは、何にでも効く…！」

家康は、自分で作った薬を飲んだ。

すると、症状は善くなっていった。

しかし、家康の担当医は…。

「家康様、自己流の治療は止めてください。私が的確な治療をしますから…」

家康に薬を飲むのを止めるように言った。

「んだと！？わしの薬が効かぬというか！もういい！貴様など、流罪じゃ！」

担当医を島流しにした。

その数ヶ月後…。

家康は、この世を去った。

死因は胃ガン。

あの日の腹痛は、食中りではなかった。

二十二番槍　鳴くまで待った狸様２（後書き）

家康は、薬の調合が趣味でした。

万病円は虫下し、紫雪は風邪薬、八味丸は精力剤など、いろんな薬を作ってたらしいです。

中でも、銀液丹は恐ろしい薬で、材料がヒ素や水銀。

これが病気に効くわけなかろうが！
死んじゃうべや！

なので、本文では「何にでも効く」とごまかしました～。

家康は、自作の薬の使用を止めろと言った医者を島流しの刑にしたそうですよ。

そりゃ止めるよ…。

恐らくですが、家康が「タイの天ぷらを食べ過ぎて死んだ」と言われるのは、そのタイミングで胃ガンになったからだと思います。

因みに、家康愛用の乳鉢や乳棒が現存します。

二十三番槍　幻の忍者頭（前書き）

今回は忍者です。

火遁の術！はーっ！

二十三番槍　幻の忍者頭

「よっ！うんしょっ！どーよ！俺の身のこなし！」

只今、敵の城に忍び込んでいる忍者が１人。

彼は、一般には風魔小太郎と呼ばれている。

今日は、情報を集めるために城に潜入したのだ。

しかし…。

「そこにいるのは誰だ！？」

敵に見つかってしまった。

「ああん？」

それに動じず、敵を睨みつけた小太郎。

「ひ、ひぃ～…！うわぁあ！！」

敵は怖がって逃げて行った。

というのも…。

小太郎は、身長２メートル超え、筋肉超ムキムキ、目が逆さまで、牙が４本あり、オマケに髭が濃い。

そんな人間に睨まれたのだ。
逃げるのも無理はない。

任務を終え、帰ろうとした時だった。

「おい！いたぞ！あいつだ！捕まえろ！」

沢山の敵に囲まれてしまった。

「ちっ！ヤバいか？予算の関係でやりたくはなかったが…」

小太郎は一度深呼吸をした。

そして…。

「火遁（かとん）の術！！」

小太郎は足元の落ち葉に火を付けた。

煙で目眩ましをした。
しかしあまり効果はなく…。

次に石を手に持った。

「土遁の術！」

石を敵に投げつけた。

敵は怒って小太郎に切りかかった。

「やべっ！必殺！金遁の術！」

小太郎は、大量の小判をばらまいた。

「おー！金！金だ！拾えー！」

「これは俺の金だ！譲らんぞ！」

小太郎は、その隙に逃げ出した。

「おー小太郎。よく帰ってきたな！」

小太郎の主、北条氏政が言った。

「俺の遁術にかかればこの位簡単だぜ！」

小太郎は胸を張って答えた。

二十三番槍　幻の忍者頭（後書き）

風魔小太郎とは、北条の忍者隊を率いるリーダーが代々名乗った名前だそうです。

有名なのは5代目。

変装が得意で、誰も本当の姿を見たことがないらしい…。

一般に伝わる小太郎の容姿は、身長が2メートル超え、筋肉ムキムキ、目がつり上がってて4本牙がある。

もう人じゃないよ！
おっそろしいよ！

小太郎は、「遁術」と呼ばれる忍術を使っていたそうです。

火遁……燃えるものを見つけて火をつけて、炎や煙で敵を困らせる荒技。

水遁……水音を立てて注目をそっちにずらす荒技。

土遁……土や石などを敵に投げつけて目眩ましにする荒技。

木遁……草木に隠れたり、樹木を切り倒したりする荒技。

金遁……金目の物をバラまいて逃げる最終手段とも取れる荒技。

特に某だってばよ！のマンガように水で竜を作ったり口から火を吹いたりするのが火遁や水遁ではありません。

現実はそんなもんです。

二十四番槍　三河物語の頑固者（前書き）

今回はですね、今までと比べると知名度は落ちる武将です。

知ってる方は少ないかも…。

二十四番槍　三河物語の頑固者

「殿は誰よりもずる賢かったから天下人になれたんですよ！」

自分の主君である徳川家康にとんでもないことを言い放ったこの老人。

家康の家臣の中でも「頑固ジジイ」として名高い大久保彦左衛門である。

「……」

そんなことを言われた家康は、黙り込んでしまった。

さて、それから暫く経ったある日。

家康の統治が上手くいき、平和な日々が続いていた。

「ふう…。ワシももう先が長くない…。今のうちに、ワシの子孫に向けて、教えを書き記しておくかのう…」

そう言って、彦左衛門は筆を取った。

「出世する人間はどんな奴なのかを書いといてやろう。後の時代にリーマンショックが起きても、大丈夫なようにな！」

そして、つらつらと書き出した。

『出世する人間シリーズ

?殿を裏切る人間
?卑怯なことばかりして他人から嫌われる人間
?世渡り上手な人間
?節約が得意な人間
?行くあてが無く、出身すらよく分からない人間』

「まあ、こんなもんじゃな…。次は出世できない人間シリーズじゃ！」

そう言うと、彦左衛門は一度置いた筆を再び持ち直した。

『出世できない人間シリーズ
?裏切らないで真面目に殿に仕える人間
?戦だけに生きる人間
?人付き合いが悪く、賄賂とかやらない人間
?物事の損得を考えない人間
?殿に長く仕え、忠節を貫く人間』

そして、最後にこう付け加えた。

『我が子孫よ！出世できなくて飢え死にしそうでも、出世を望んで卑怯なことをするなよ！どうせこの世なんか、花火だ！露だ！一瞬で終わるんだ！人は一代だが、名は末代じゃ！名に泥を塗るようなことはすんなよ！』

彦左衛門は静かに筆を置いた。

「これで…大久保家も…安泰…じゃな…」

そして、満足げに眠りについたのだった。

最期の頑固ジジイは、微笑んでいた。

二十四番槍　三河物語の頑固者（後書き）

これが今に伝わる「三河物語」です。

作者は大久保彦左衛門という頑固な老人です。

三河物語の中身は本文で書いたやつです。

「裏切る者は出世する」って最初見たときは驚きました。

私には、彦左衛門が言いたいことがよく分からないんですけど…。

三河物語の中身、ひねくれてるんですもん！

まぁ、これが書かれたのは江戸の平和な時代ですから。

戦国時代にこんなことが言えましたかね～？

「裏切る者は出世する」とか書いたらそれだけで謀反人扱いされそう…。

因みに、彦左衛門が三河物語書いてからすぐに亡くなったかどうかは知りません。

本文では物語性を持たせてみただけです…。

本当は「四の太刀」として書こうかとも思ったんですが、止めまし

た。

深く調べるとなかなか良い話になるかも知れませんね～。

本文中の「リーマンショック」発言はなんとなくですので、気にしないでください…。

以上！大久保彦左衛門でした～！

二十五番槍　うつけの宝（前書き）

本文とはまるで関係ないのですが、血天井ってホントにあるんですね…。
養源院のが一番生々しいらしいです…。

写真見てないのですが、手足がくっきり見えるらしいです。

案内の方が、「ここが顔で～。ここが足で～…」と教えてくれるらしいです。

…私、そーゆーの苦手なんですよね…。

血天井って、都市伝説かと思ってたので…。

さて、オッカナイ話の後は心暖まる？お話を！

二十五番槍　うつけの宝

とある冬の出来事。

「うんしょっ！ふぅ～！信長様～！ミカンですよー！」

こちら、信長の小姓、森蘭丸。

13歳のころから信長に仕えている。

小姓とは、殿の身の回りの世話をする、言ってしまえば雑用係である。

最も、信長と蘭丸の間には、主君と小姓以上の関係が成り立っているのだが…。

「おー！お蘭！ミカンありがとう！」

信長が蘭丸に礼を言った。

「足りなくなるといけないので、もう少し持ってきますね！」

そう言うと蘭丸は、ミカンを乗せた台を抱えてやってきた。

「お蘭！お前の力では危ないぞ！転ぶぞ？無理するなよ！」

「大丈夫ですよ！このくらいなら！ってうわ！？」

バランスを崩して蘭丸は転んだ。

「あらら…。言わんこっちゃない…」

そう言って、信長は蘭丸がミカンを拾うのを手伝った。

「あはは…。信長様の言う通りでした…」

暫くして、部屋に信長と蘭丸しかいなくなったとき、信長は蘭丸に声を掛けた。

「お蘭、先ほどは、ワザと転んだな？」

「あっ！気付かれてましたか…。信長様の仰ったことが外れては申し訳ないと思いまして…ごめんなさい！」

「お前というやつは…。お蘭！一つ聞くぞ！天下と同じくらい…いや、それ以上に大切な、わしの宝は何だと思う？」

「…もしかして…。わ、私でしょうか？」

信長は何も言わず、ただただ優しく笑った。

二十五番槍　うつけの宝（後書き）

信長と蘭丸は、衆道（知らない方は調べてくださいね？）の関係にあったとも言われてるんです。

そんなわけで、お互いにお互いを思いやる気持ちは強かったのだと思います。

信長の言う通りになるようにわざと転んだり…。

「わしにとって、天下にも変えられない大切な宝はを当ててみよ！」と信長に聞かれた蘭丸は「私でしょうか？」と返したといいます。

普通の関係じゃ、なかなかこうは答えられないよ？

互いに心から信頼できる関係っていいですよね！

私もそんな関係の友人が欲しいです…。

あ、衆道じゃないよ？

そんな面も含めて、歴史から学ぶことは多いと思います。

歴史は生きる上での過去問だー！

と思ってます。

二十六番槍　深すぎる妻への愛（前書き）

利休七哲の一人、細川忠興と細川ガラシャ（玉）の愛の深さを良く伝えている逸話です。

早めに言っておきましょう！

あとがきが驚きの長さです。

二十六番槍　深すぎる妻への愛

１６００年９月１５日。
関ヶ原。

「うおぉぉぉぉおおお！」

どこからともなく鬨（とき）の声が挙がり、関ヶ原の戦いが始まった。

「うあぁぁあ！！おらおらおらぁ！」

そんななか、敵陣に真っ先に飛び込んだ東軍の武将がいた。

細川忠興。

彼にとって関ヶ原の戦いは特別なものだった。

前日の夜……。

忠興の本に一報が入った。

「細川ガラシャ、自害。西軍の人質となるのを拒み、小笠原少斎の介錯を受ける」

「忠興よ…。真に、残念であった…。今度の戦はお前の助けが無くても大丈夫じゃ！一度、大坂に戻って、ガラシャ殿の顔を…」

忠興を呼び出した徳川家康は、わざと笑顔を作り、忠興に大坂に帰ることを勧めた。

「家康様…！そのお心だけで、私は…充分ですよ…。今更、帰る訳には行きません。明日は、私に先鋒をやらせてください！必ず、家康様の勝利に…！我が妻、玉の敵を討たせてください！」

自分でも気付かないうちに、忠興は叫んでいた。

今、忠興はガラシャの為に戦っている。
細川家の為に、命を捧げてくれた最愛の妻の為に！

忠興の活躍もあり、関ヶ原は東軍の勝利で終わった。

戦後、急いで豊前に戻った。

そして、ガラシャの葬式をキリスト教のやり方で行った。

「玉よ…。　苦しかったであろう…。　キリスト教では自害は許されない。　しかし、細川家のために命を捧げてくれた…。　そんなお前を…私は幽閉した…。　しかも、お前の唯一の支えであるキリスト教すら奪おうとした…。　本当は…私が一番お前を理解してやらなければならなかったのに…！　玉よ…。玉よ…！」

忠興の目には、涙が浮かんでいた。

「玉…。愛してるぞ…！」

その後、忠興は正室を持つことはなかった。

二十六番槍　深すぎる妻への愛（後書き）

なかなか…心暖まるお話じゃありませんでしたか…？

ではでは。

それをぶっ壊していこうじゃありませんか！

まず、ガラシャは自害が禁止されているキリスト教徒。

そこで、家事である小笠原少斎という人に胸を突かせて討ち死にするという形で最期を遂げました。

その知らせを聞いた家康は忠興に大坂に戻ることを勧めるも忠興は拒否。

東軍の先鋒として大活躍しました。

因みに、「ガラシャ殿の顔を…」とか本文では書いちゃいましたけど、骨すら残らなかったらしいです。

焼けちゃって…。

その後、キリスト教方式でガラシャの葬式を行ったそうです。

月命日には必ず供養をして、正室も生涯取ることはありませんでした。

ここまでが本文のお話。
細川忠興を良い人としておきたい方はこの後は読まないことをお勧めします…
。
本文は忠興の良い面だけを拾ってみたので…。

忠興はですね、明智光秀の娘であるガラシャが正室のため、自分まで謀反人にされるのが嫌でガラシャを幽閉しました。

他の説もありまして、女好きの秀吉に美しいガラシャを見られたら何されるか分からんから、見つからないように幽閉した…。とも言われてます。

また、ガラシャからキリスト教を奪おうとしたこともありました。

ガラシャの喉に刀を突き付けて…。

それでも拒否されたので、ガラシャと一緒にキリスト教に入った女性の髪を切って寺に追放しました。
寺って…。仏教だよ…？

さらにさらに、ガラシャが「あなたは生きなさい！」と千世という忠興の息子の嫁を逃がしました。

すると忠興は、「何でおめーはガラシャと一緒に死ななかったんだ？」と。
息子に離婚を命令しました。

それを拒否されると、嫡男から降ろしました。

あははぁ…。

性格に難があるけど、ガラシャを愛していたのには変わりはないんですよ？

だって、ガラシャとちょっと喋った庭師に嫉妬して、その庭師を斬ったくらいですから…。

人間、愛が深すぎると何するか分かんないねぇ～…。

それ以上に…。

長いあとがきだねぇ～…。

二十七番槍　尾張のうつけ革命児２（前書き）

暗い話こそ明るく！

というか、普通はドン引きするようなお話です。

二十七番槍　尾張のうつけ革命児２

１５７３年。
姉川。

ここで、数多の雄々しき魂が散った。

姉川の戦い。

ことの発端は…。

「我が親友、朝倉義景を攻めるとは！おにいちゃん！話が違うんだぜ！？」

そう言ったのは信長の妹を嫁として、信長の義理の弟となった浅井長政。

因みに彼、織田信長に攻められている朝倉義景の大親友。

つまり、親友と兄が喧嘩してる状況。

「俺は、最近おにいちゃんになったおにいちゃんよりも、昔から親友の義景の味方になるんだぜ！覚悟だ！おにいちゃん！」

浅井長政、信長を裏切る。

「あー！お、弟が裏切った！？是非に及ばず…！ぶっ殺す！」

信長がキレて、起きたのがこの姉川の戦い。

キレた信長は強かった。

「はっ！織田軍１３段の結界展開！もう負けないぜ！」

しかし、浅井長政も強かった。

「１枚～。２枚～。３枚～。…結界突破！」

しかし、勢いもそこまで。

１１枚突破したところで力つきた。

「おい義景、長政、ついでに長政の親父！どうなるかわかってるよなぁ？」

信長は指をポキポキと鳴らしながら三人に歩み寄った。

「ヒィィ～！」

「お、おにいちゃん…！？」

「わしの出番少なくない！？」

３つの悲鳴がこだました姉川。

そして翌年の正月。

信長は家臣の前でとんでもないものを取り出した。

「うふふぅ…。僕信長です！秘密道具！どくろ～！」

信長がお腹の三次元ポケットから取り出したそれは、未来のアイテムどころか、金ピカのどくろだった。

「これが義景の！こっちが長政の！で、これが…名前忘れた…。長政の親父の！久…久ま…。忘れた！」

「久政です！」

家臣に突っ込まれてしまった。

「よしみんな！アケオメ～！コトヨロ～！これを肴に酒を呑め！」

信長は笑顔で叫んだ。

「ほぉう！こりゃ～素晴らしさ酒の肴だねぇ！」

家臣たちはそれを見ながら酒を呑んだ。

二十七番槍　尾張のうつけ革命児２（後書き）

姉川の戦いで浅井・朝倉を滅ぼした信長は、翌年の正月にスゴいものを取り出した。

それは、金箔押しの３つのドクロ。

義景、長政、久長と札が貼ってあったそうです。

それを酒の肴にしたらしいですね。

他にも説があります。

ドクロを杯に酒を呑んだ説。

ドクロの上に杯をくっつけた説。

因みに、この逸話は、ドクロが現存しないことや、出展が偽りが多いことで有名な資料（「信長公記」だったと思います）なので、嘘なんじゃ？との見方が強いです。

古代中国三国志では、敵の大将のドクロを杯にすることがあったそうです。

なので、それを知っている人間が日本の戦国時代に当てはめた的な見方もできます。

しかし…。

信長ならやりそう…。

あの方は容赦ないからねぇ…。

二十八番槍　裏切り金吾（前書き）

戦国、ちょっと怖い話。

あなたは呪いを信じますか？

二十八番槍　裏切り金吾

「小早川ぁ！この秀吉様の恩を忘れた人面獣心め！3年の内に呪い殺してやる！」

関ケ原の戦いで唯一自害した武将、大谷吉継はそう叫んで腹を切った。

それから暫く月日が流れた。

大谷に「呪い殺しす」と言われた小早川秀秋の精神は、完全に崩壊していた。

「町の人はみんな、俺のことを裏切り者だと言う…。貴様らだって、鉄砲撃ち込まれたら裏切るだろ！クソが！」

小早川は苛立っていた。

こんな時は酒や女で気を晴らそう。

こんな時は。

こんな時は…。

「秀秋様、酒や女は程々にして、政治をやってください！あなたは、国の主なのですから！」

我慢の限界に達した家臣が小早川に言った。

「あのさ、お前、家臣だよね？そのくせに、俺に口出しすんじゃねーよ！失せろ！」

小早川は、その家臣を処刑した。

「おい…。このまま秀秋様の下にいて俺たち大丈夫なのか？」

「ダメだ！俺、抜けさせてもらう！」

「俺も！」

いつしか、家臣たちは小早川家を出て行った。

そして、ある日。

「ぎゃー！わー！あー！吉継……！」

小早川秀秋、狂死。

それは、関ケ原の戦いの3年後のことだった。

二十八番槍　裏切り金吾（後書き）

小早川秀秋は、兄からも劣っており、時より奇声をあげていたらしい…。

何があった？

そんな彼、自分の裏切りが天下を決めたことを自覚してなかったと言われています。

大谷吉継が、裏切った小早川軍とぶつかった後自害した時には「恩を忘れた人面獣心」とか「3年以内に呪い殺す」とか色々言われたみたいですよ。

結果、秀秋は関ケ原の3年後に発狂して死んだみたいですけど…。

呪いが効いた…？

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！（前書き）

本当ににあったとは言い難いお話です。

都市伝説的なものなので、笑って流してくださいな！

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！

ここは駿府城。

天下を手中に収めた徳川家康は、平和な日々を送っていた。

そんなある日…。

「家康様！侵入者が現れました！」

家臣が家康の所に駆け寄って来た。

守りが堅い城への侵入者とあらば、ただ者ではない。

「どんな姿をしていた？」

家康は家臣に聞いた。

「それが…腕があるのに、指が無いんです。子供くらいの大きさの…」

そこまで家臣が話した時だった。

「あっ！あれです！あいつですよ！」

家臣が指差した方を見ると、確かに何か立っていた。

しかし人ではない。

顔と胴体に区別がなく、顔から手足がはえている生き物だった。

「今捕まえますんで！よっ！あれ！ほら！んしょ！」

家臣が何度飛びかかっても、スラスラ交わすその生き物。

「あ…あっ…」

声にならない声を出す家康。
開いた口が塞がらないとはまさにこの事。

「なんだそれは！？気持ち悪いから追い出せ！」

何とか家康は家臣に命令した。

暫くすると、家臣が戻ってきた。

「ふぅ～…。やっと追い出せましたよ～…」

「あれは何だったんだ…？」

「分かりません…」

後日、ふとした瞬間に、家康は自分の担当医に化け物のことを話した。

「おお！それは『ぬっぺふほふ』という妖怪ですぞ！百鬼夜行にも登場します。あれを食べると力持ちになれるのに…。逃がしちゃうのは勿体無いです…」

残念そうに担当医は言った。

「いや、キモくて食えないから！食わないから！キモいし！」

家康は見た目にやられていた。

二十九番槍　ぬっぺふほふを捕獲せよ！（後書き）

「ぬっぺふほふ」
検索すると出ますよ？

あれは食えないねぇ～…。

駿府城に出た妖怪のお話でした～！

三十番槍　身分を超えた一致団結（前書き）

「戦国物なんだから戦について書けよ！」

「ぅちゅ…わかった」

こんな感じのやり取りがありまして…。

で、初の戦物。

戦は難しいんですよね～。

武将喋らなくても話進むし…。

あの…。

初なので、かなり多目にミテクダサイ…。

三十番槍　身分を超えた一致団結

ここは信濃、上田城下。

１６００年８月末。

上田城主である真田昌幸の言葉が掲げられた。

「この上田の地を防衛する！手柄をあげた武士・町人・百姓身分関係なく敵の首一つにつき土地を百石与えよう！」

防衛戦に町中の人に協力を求めるものだった。

というのも、十五年前に一度追っ払った徳川秀忠が、再び上田城を攻めてきたのである。

秀忠軍は３万８千。

昌幸軍は２千５百。

力の差は歴然。

そこで、町の人に協力を仰いだ。

首一つで百石ともあり、沢山の人が来た。

上田城に秀忠軍到着。

それの前に、自ら出て行った昌幸。

「高砂や、この浦舟に帆を上げて、この浦舟に帆を上げて、月もろともに出で潮の、波の淡路の島影や、遠く鳴尾の沖過ぎて、はや住吉に着きにけり、はや住吉に着きにけり」

昌幸は、高砂の舞を踊ってみせた。

「んだあんにゃろー！馬鹿にしやがって！やっちまえ！」

秀忠軍は昌幸の挑発に乗った。

「はっ！バカ共め！全ては作戦通りよ！」

昌幸は城中に引いた。

「逃がすな！行くぜ！」

秀忠軍の攻撃が始まった。

「お、おい！止めろ！まだ命令は出してないぞ！」

秀忠の制止を誰も聞き入れなかった。

一方昌幸軍。

「皆の者！今だ！お粥用意！放てー！」

みんなで作ったお粥を武器に、町の住民は戦った。

「熱っ！うあ！お粥だと！？」

「うああ！て、撤退！撤退だ！」

秀忠軍が撤退を開始した。

しかし…。

「逃がすか！神川の堰を切るのだ！」

あらかじめ、堰で神川をせき止めていた。

秀忠軍を上手く神川へ誘導し、堰を切って奴らを流す為に！

狙い通り、秀忠軍は壊滅。

秀忠は、関ケ原の戦いに間に合わなかった。

三十番槍　身分を超えた一致団結（後書き）

第二次上田城の戦い。

城下の住民も、みんな城にこもって戦いました。

お粥で攻撃したり、竹槍で攻撃したり、伏兵使ったり…。

真田はやっぱり強いんですね！

神川の堰をぶっ壊して徳川秀忠の兵を流したり…。

仕舞いには、城下に火を放ちました。

城下の住民を城に入れたのは火を放つためだったんですね。

本当は、このお話はですね、十七番槍として投稿する予定だったのですが…。

上手く書けないので放置してました。

そしたら、某五円玉様に「戦書けよ！」って言われまして…。

下手くそながら、投稿させて頂きました。

一番言いたいのは、「第二次上田城の戦いの武器はお粥だった」です。

では！

戦の逸話もたまに入れて行きたいと思います！

歴史絵巻第一幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～大阪城～（前書き）

初の架空物語。

本当は、別に短編として上げようかと思っていた作品です。

実体験をもとに書いてみました！

第１段は大阪城です。

歴史絵巻第一幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～大阪城～

「先輩！今日はどこの城に！？」

彼女は村上乙葉（むらかみおとは）。

いわゆる歴女。

高校１年生。

顔も可愛いのだが、歴史の話しかしないため男と付き合ったことはない。

「ん～。まずは大阪城だな！」

彼女は焙烙晴美（ほうろくはるみ）。

高校２年生。

彼女も乙葉と同じく歴女。

乙葉より重症で、ひたすらに戦国武将を愛する。

この２人、高校では「歴史研究部」という部活に所属している。

部員は現在２人のみ。

今日は、部活動の一環として、大阪城に出向いた。

勿論、部費で。

「ほえ～！これが大阪城ですかっ！デカいですねー！」

乙葉が感心したように声を上げた。

「ここは石山本願寺の跡地なのだ！そこに建てられたのが戦国最強にして最凶の城！大阪城！」

晴美の声も大きかった。

「最強にして…最凶…？」

「うむ！難攻不落の城だったが、夏の陣、１６６５年の落雷、戊辰戦争と何度も焼けている！運が悪い城なのだ！」

「じゃあ…この天守は…？」

「これは昭和６年のものだ！」

どんどん天守に近づいていく二人。

幅１００メートルの堀、青屋門、極楽橋。

数々の見所を通り過ぎて天守の下へ。

「極楽橋がコンクリートなのは残念だ！」

「再建ですから仕方無いですよ…」

料金を払い、天守へと向かう二人。

「あー！私あの井戸知ってます！黄金水ですよね！？秀吉が金を投げ入れた井戸ですよ！」

興奮気味に語る乙葉。

「ふふふ…甘いぞ乙葉！その逸話は偽りぞ！」

人差し指を乙葉に突きつけて叫んだ晴美。

「な、なんですって！？そ、そんな…」

乙葉はその場にひざまずいた。

天守入り口手前、大砲が置いてあるのに気付いた晴美。

「なんだ…？国崩しか？」

大砲を眺めながら晴美が呟いた。

「これは…。『お昼のドン』ですって…。時報に使ってたらしいですよ」

説明看板を読みながら乙葉が言った。

「知らんな…。行くぞ！いざ天守へ！」

「ああっ！せ、先輩！待って下さいよぉ～！」

慌てて晴美を追う乙葉だった。

「何故…？何故エレベーターが…？これでは只の博物館ではないか！」

「城の内部に憤られても困ります！それより、黄金の茶室見ましょうよ！」

「大阪城天守閣所蔵の黄金の茶室…。あれはレプリカだっ！」

「なんとっ…！」

またしてもひざまずいた乙葉。

「あれは現存しないのだ…」

二人は天守閣の展望までやってきた。

「よっ！いざっ！真田丸！ってあれ…？」

戸惑う乙葉。

「ん？どした？乙葉？」

「…真田丸が…。真田丸がありません！」

涙目で叫んだ乙葉。

「あはははは！無いよそんなの！徳川が焼いちゃって！まあ、あったのはあの辺りかな？」

晴美は指で丸く示した。

「うぅ…真田丸～…」

二人は天守閣を出た。

「楽しかったな～。今度はもっとゆっくり回りたいよ。真田の抜け穴とか、真田が討ち死にした神社とか！仲間の介抱してるところを襲うとは…！許すまじ徳川軍！」

徳川軍への怒りを露わにした晴美。

「大丈夫です！真田は討ち死にしてません！淀君と秀頼を連れて九州まで無事に逃げましたよ！討ち死にしたのは穴山さんです！真田の影武者ですよ！」

「そうか…。そうだよな！九州に真田の子孫と言われる方もいるし！」

「はい！」

二人の絆がまた深まった。

帰りの電車の中。

「あ～！蛸石と火薬庫見忘れたー！」

「次回のお楽しみですね！」

「…そうね！」

二人は部費での旅を楽しんだ。

歴史絵巻第一幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～大阪城～（後書き）

登場人物の名前が二人とも村上水軍関連だと見破ったあなたはもう引き返せません！

「村上」はストレートですが、「焙烙」はわかりにくかったですかね？

村上水軍の武器に、焙烙玉（ほうろくだま）という手榴弾があったんですよ～！

私自身、大阪城の火薬庫とか蛸石とか、重要なもの見逃してます…。

修学旅行だとゆっくりできませんね…。

次は…小田原城かな？

では！

暇なときに時々入れていきたいと思います。

三十一番槍　兵衛，Ｚの絆（前書き）

サブタイトルの元ネタ分かる方～？

史実だと兵衛，Ｚではなく二兵衛です。

三十一番槍　兵衛，Zの絆

「報告！報告！有岡城にて、荒木村重、信長に対して謀反！」

家臣から秀吉の元に火急の知らせが入った。

「うぬぬ…！村重！ぶっ殺す！」

憤る秀吉。

それをよそに一人の男が口を開いた。

「私に行かせて下さい」

黒田官兵衛だった。

（ふふふ…私の交渉力を2割程使えば村重など簡単に説得できるさ！）

しかし…。

帰って来ない。

待てども待てども帰って来ない官兵衛。

「官兵衛の野郎！裏切りおったな！奴の嫡男の松寿を殺せ！」

そう命令したのは織田信長。

信長は裏切ったと言っているが、その頃官兵衛は、村重に捕まり投獄されていた。

唯一の心の支えはフジの花。

過酷な状況だった。

「信長様、松寿の処刑、私にお任せを！」

名乗り出たのは秀吉の軍師であり、官兵衛の友人でもある竹中半兵衛だった。

処刑を任された半兵衛だったが、松寿を殺したりはしなかった。

官兵衛が裏切る訳がない。

そう思っていた。

1年後、有岡城は落城。

牢屋から足が不自由になった官兵衛が救出された。

官兵衛は裏切りなどしなかった。

このことが証明されたのだった。

信長が、官兵衛を呼び出した。

「官兵衛よ…。わしはお前が裏切ったと思い…。松寿を…松寿を殺してしまったんじゃ…。許せ…許せよ官兵衛…」

「そっ…そんな…。私は…なんのために…」

そんなとき、傍にいた家臣の一人が二人に言った。

「そのことなんですが…。松寿様は、半兵衛様がこっそりかくまって、今も元気に育ってますよ！」

半兵衛は自分の屋敷で松寿を育てていた。

「半兵衛っ！あやつめ…！」

「半兵衛…。我が友よ！」

二人は泣きながら喜んだ。

「半兵衛に礼を言いたい！今どこにいるんだ！？」

官兵衛が聞くと、家臣の顔が濁った。

「…昨年、病の為に…。半兵衛様はもう…」

「……半…兵衛…」

官兵衛は竹中家を生涯大切にしたのだった。

三十一番槍　兵衛，Ｚの絆（後書き）

竹中半兵衛と黒田官兵衛の友情物語でした。

仲良かったみたいですね。
天才軍師二人組み。

本文中で突然出てきた松寿は後の黒田長政です。

サラッと流しましたが、フジの花を心の支えにしていたのは史実なんですよ～。

荒木村重が官兵衛を殺さなかったのは、あやつがキリシタンだったから、なるべく殺生を避けたからだと言われています。

また、官兵衛が自害しなかったのも、キリシタンだったからしいです。

地味な部分でも歴史を変えてるんですね、キリスト教は。

まあ、キリスト教のせいで、ヨーロッパとの戦争一歩手前まで行ったのですが、それはまた別の機会に。

官兵衛は、生涯で一度も死罪を言い渡したことが無いんですって！

私、官兵衛好きですよ？

歴史絵巻第二幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～小田原城～（前書き）

「先輩、意外と私たちの出番チャチャッと回ってくるんですね」

「何でも、作者が旅行記を書きたいらしいんだ！」

「ああ…。そういうことでしたか…」

「また明日辺り私たちが登場するかもよ？」

「作者、何ヶ所城行ったんでしょうね？」

「６箇所だ！」

「じゃあ、６話はやるんですね？」

「いや、１話で２つ紹介する回がある予定だそうだ！」

「じゃあ５回か…」

「「しばらくお付き合いください！」」

歴史絵巻第二幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～小田原城～

「やって来ました！小田原ー！」

「おおっ！いきなり天井には小田原提灯がっ！」

小田原駅の改札を出たところで、ハシャぐ二人の女子高生。

先輩の焙烙晴美（ほうろくはるみ）と、後輩の村上乙葉（むらかみおとは）。

高校の歴史研究部に所属している、歴女である。

今日も部費をふんだんに使い、部活動という名の旅行に来た。

「小田原楽しみだったんですよ～！」

乙葉がテンション高めに言った。

「何故だ？そりゃ、北条早雲が大森から奪い取った小田原城があるから、楽しみなのは分かるが…。村上家は小田原に縁があるのか？」

晴美が聞いた。

地味に城の説明が入っているのがいかにも晴美らしい。

「いえ、別に縁（えん）も縁（ゆかり）も縁（よすが）も縁（えにし）もありませんよ。ただ、去年来たんですが、天守閣に入らなかったので…」

「縁」の字４連弾。

それよりも気になるのは…。

「去年来たの？」

「はいっ！ただ、お金無くて天守閣には…」

（あれ？天守閣って、入場料３００円くらいじゃなかったっけ？）

事前に調べておいた晴美には一抹の疑問が湧いた。

二人は歩いて小田原城に向かった。

「天守閣を見る前に、周りを散策しよう！」

晴美が言い出した。

乙葉はそれに快く賛成した。

まず見つけたのが国の有形文化財にも指定されている「清閑亭」。

「ここは…なんですか…？」

凄く静かな古民家といった雰囲気の建物。

そう。見た目古い民家なのだ。

「ここは…黒田長成侯爵の別邸で…。大正時代の建物だ！」

パンフレットガン見。
晴美もなんだかよく分からないらしい。
「黒田長成…？黒田長政の何かですか？」
乙葉が聞いた。
「ん～…。みたいね…」
今度は携帯電話ガン見。
調べたらしい。
「でもここ…。眺めが良いし、静かだし、なんだかくつろげますね！」
清閑亭の二階からは、海が見えた。
「ほう…。ここ、小田原城の三の丸の中らしい。外にあった土は土墨だったのか…」
乙葉の話をまるで聞かないで晴美はパンフレットとにらめっこ。
「…！乙葉！ここ、静かだし眺めも良いし、風も気持ち良くて最高の場所だな！」
「先輩、さっきそれ私も言いました…」

二人は清閑亭を出て再び小田原城の周りを歩いた。
八幡山古郭東曲輪（はちまんやまこかくひがしくるわ）、早川口二重戸張（はやかわぐちふたえとばり）、幸田口門跡土塁（こうだぐちもんあとどるい）、大手門跡の鐘…。
城の周りだけでも結構見るものはあった。

そしていよいよ天守閣へ。

「このショウブ畑…。何か違和感が…」

乙葉が言った。

天守閣の下、妙に細くて長いショウブ畑があった。

「よく気付いたな！これは水堀の跡だ！」

晴美が叫んだ。

「やはりっ！」

「深さはメートル単位だったらしい！」

「なんとっ！」

いざ天守に入ろうとしたとき、晴美がある物を見つけた。

「あの檻は…。何を飼ってるんだ？」

「ああ！あれはサルですよ！去年もいました！」

小田原城の天守の下では、ニホンザルが飼われている。

「イヤミだ…」

晴美が呟いた。

「え？ああ…。小田原城落としたの、秀吉ですものね…」

乙葉も苦笑した。

天守閣の中。

「うわ～！初めて入りました！」

テンションが高い乙葉。

中には甲冑や見たことある肖像画、刀などが展示されていた。

そして展望台。

「あ！あの山は！」

乙葉が勢いよい指差した方向には、一部木が剥げた山があった。

「あれが…石垣山一夜城…！」

感動のあまり泣き出す乙葉。

そんなにか？

「官兵衛の知略が伝わる一夜城な！実際、一夜で作ったわけではないけどな…」

「一夜で木を切り倒して敵に見せつけたんですよね！」

「そう！城自体は１ヶ月くらいだっけか…」

二人は小田原城を後にした。

「模擬天守だったり、ほとんどが再建だったけど楽しかったな！」

満足げな晴美。

「はいっ！再建なのは仕方ないですよ。関東大震災でやられてますからね…」

「まあ、そうだが…」

「あっ！先輩！もうあと一箇所寄らせて下さい！」

突然乙葉が叫んだ。

「いいけど…どこ？」

「駅前のお土産屋です！蒲鉾せんべいが絶品ですよ！」

蒲鉾が名物の小田原。

そこであえて蒲鉾本体ではなくせんべいをチョイスするあたり乙葉である。

「いいだろう！」

「ありがとうございます！」

二人はしばらく買い物を楽しんだ。

歴史絵巻第二幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～小田原城～（後書き）

清閑亭はオススメスポットです！

居心地最高！

小田原城は海が近くてなかなか良かったですよ！

私が行ったときは台風が海上にあって、晴れてたけど波が高かったですよ…。

小田原城でサル飼ってるのはイヤミとしか思えない…。

結構広い空き地みたいな所もありました。

本当は門なんかも紹介したかったんですけどね。

是非一度行ってみてくださいな！

近くに北条氏政の墓もありますし！

遺構はよく残ってると思います。

蒲鉾せんべいは超オススメ！

安いですしね☆

駅前のお土産屋が並んでるところで買えます。

次からはもの凄い地味な城に入ります～。

とりあえず次回は松山城です。

埼玉の……。

三十二番槍　河越城を救出せよ！（前書き）

合戦シリーズ第二段です！

三十二番槍　河越城を救出せよ！

「河越城が、扇谷上杉朝定（おうぎがやつうえすぎともさだ）に囲まれただと！？」

小田原にいた北条氏康は知らせを聞いて叫んだ。

「皆の者！これより河越城救出に向かう！指揮はわしが取る！」

氏康は、８０００の兵を率いて河越城へと向かった。

そこまでは良かったのだが…。

敵となる上杉軍の数は８５０００の大軍。

それを知った氏康は、朝定に手紙を書いた。

『河越城を明け渡すことを条件に、停戦しませんか？』

これを見た朝定は大笑いした。

「あはは！馬鹿め！力の差は歴然だ。貴様らが負けているのに、停戦などとわけの分からぬことを…。敵は怖じ気づいているぞ！北条をぶっ潰すチャンスだ！」

朝定は、２５０００の大軍を北条氏康が陣を置いた砂久保に送った。

「何とっ！？上杉が攻めてきたっ！？ん～…。撤退！撤退だっ！」

戦うことなく氏康は撤退してしまった。

「氏康め！この上杉を恐れたかっ！」

勝利を確信した朝定だった。

その夜。

「鎧は着るな！紙の羽織りを着ろ！そして首は絶対に取るな！斬り捨てよ！」

氏康は、軍にそれだけを命令した。

そして日付の変わった午前０時。

「行けっ！」

氏康が刀を突きつけた先には、上杉軍が眠っていた。

突然のことで慌てる上杉軍。

「一番隊は切り崩せ！二番隊は三番隊が突っ込んだら逆進しろ！三番隊も斬り込め！」

正確に采配を振るう氏康。

四方八方から北条軍が襲い掛かる。

暗い中、紙の羽織りがよく目立った。

「引き上げよ！反撃を受けるな！」

氏康は早々に兵を引いた。

この奇襲により、上杉朝定は討ち取られた。

「氏康様、これほどの戦ができるのに、何故停戦を申し込んだのですか？」

家臣が氏康に尋ねた。

「朝定が停戦を受け入れる訳がないのは最初からわかっていた。戦うことなく撤退したことも手伝って、朝定はわしが怖じ気づいたものだと完全に油断しただろう」

「じゃあ…全ては、上杉を油断させるための…！」

「そういうことじゃ。次は松山城じゃ！」

氏康は松山城をその足で攻略し、小田原城へと凱旋した。

三十二番槍　河越城を救出せよ！（後書き）

河越夜戦。

扇谷上杉朝定と北条氏康の戦いです。

戦わずして撤退したり、わざと停戦しようと申し出たりして、朝定を油断させた氏康。

全てが作成通り。

氏康は油断した朝定に夜襲をしかけて勝利しました。

氏康は、兵に紙で作った白い羽織りを着せて夜でも目立つようにしたり、合い言葉を決めて同士討ちを防いだりしました。

河越城の戦い、ほとんどが私の地元から近いのでテンション上がります（笑）

因みに、今は河越ではなく川越です。

三十三番槍　ザコと小物（前書き）

今回は私が大好きな逸話です。

さすが片倉さん！

三十三番槍　ザコと小物

「…参りました」

いきなり出て来て土下座しているこの男。

服装が凄まじい。

なんてったって真っ白な死に装束にでっかい十字架を背負っているのだ。

伊達政宗、豊臣秀吉に恭順する。

「さて、片倉さん。５万石あげるから豊臣に来ないか～い！？」

政宗の重臣、片倉景綱を引き抜こうとしている背の低い猿顔の男、豊臣秀吉。

「…嫌」

景綱は秀吉の誘いを断った。

「断っただと？秀吉様を侮辱したなっ！」

これにキレた秀吉の重臣、福島正則。

すぐに景綱のところに走って行った。

「鳥無き島のコウモリが来たぞ！」

正則はそう叫んだ。

鳥は強い者、コウモリは弱者を指す。

つまり、「奥州は強い奴がいないから政宗なんかでも領土を広げられた」って意味。

カチンッ！

景綱も頭に来た。

「ちんちくりんのリンリン！」

それだけ言い放った。

ちんちくりんは背が低い秀吉のこと。

リンリンは猿の首輪の鈴。

つまり、「猿顔のチビの家来ごときがっ！」という意味。

しかし正則は…。

「な、なんだ？ちんちくりん？リンリン？意味が…わからん！」

景綱をバカにしたつもりが逆に悔しい思いをさせられた正則だった。

三十三番槍　ザコと小物（後書き）

ちんちくりんのリンリン（笑）

「鳥無き島のコウモリ」って、信長が長宗我部相手に言った言葉だったような…。

そろそろ松山城に行った時のを書こうかと思ってます。

歴史絵巻第三幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～山田城・松山城～（前書き）

眠い…。

頑張って書きました。

この娘たちの旅、いつまでやりましょう…。

とりあえず、私が城巡りを続ける限りは書きます！

歴史絵巻第三幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～山田城・松山城～

「やって来ました！森林公園～っ！あれ？森林公園…？」

テンション高く叫んだものの、何故こんなところに来たのかわかっていない村上乙葉（むらかみおとは）。

「ふふふ…今に分かるさ！さぁ中に入るぞ！乙葉！大人二枚で８００円だ！」

乙葉にチケットを買う命令を出したのは焙烙晴美（ほうろくはるみ）。

この二人、同じ高校に通い、歴史研究部の先輩と後輩。

晴美が２年で乙葉が１年である。

今日も部費を使って城巡り。

しかし、やってきたのは何故か埼玉県滑川町にある国営森林公園。

乙葉が戸惑ったのも無理は無い。

乙葉が買ってきたチケットを渡して森林公園の中へ入った。

入ってすぐにある噴水の脇を抜けて歩いていく。

ちょっと進み、山の中へと続く階段の前で晴美が立ち止まった。

それに合わせて乙葉も立ち止まる。

「あっ！」

乙葉が、階段の横に立てられた小さな看板を見て声をあげた。

「山田城…？」

看板には確かにそう書いてあった。

「そう！山田城跡！森林公園の中にも城があったのだ！」

胸を張る晴美。

早速、階段を上り始めた二人。

「この土がちょっと高くなってるやつが土嚢ですかね？で、こっちの溝が堀でしょうか！？」

興奮気味の乙葉。

「恐らくは。で、この広い平らな場所に何かあったのだろう！しかしこの城…」

偉く曖昧な晴美の言い方。

彼女自身、この城について詳しくは知らなかった。

「先輩！あそこに看板がっ！

」

晴美の話を遮るように叫んだ乙葉が指差す先には、確かに看板があった。

その看板には、山田城についての解説が書いてあった。

「戦国時代の出城…。小高大和守父子及び贄田摂津守が居城にした…。小田原攻めの時に前田利家に落とされた…。なるほど。いやしかし…」

看板を読んだ晴美は首を傾げた。

「どうしましたか？先輩？」

晴美の様子を見て乙葉がきいた。

「いや、この城…。妙に傾斜が急な所にあるなと…。それに、城内に郭を作ろうとした跡がある…。もしかして、未完成で落とされたんじゃ…？」

「先輩！そんなことまで分かるんですか！凄いです！」

「妙に傾斜がキツいのも、削る作業の途中だったからだろうな。鎌倉街道を抑える重要な城も、未完成で終わったんだな～」

それを聞いて驚いた表情をする乙葉。

「鎌倉街道ですか？」

「うん。ほら！」

晴美が指差した場所には、確かに道があった。

「この道が…？」

「鎌倉街道らしい。マップによるとな」

晴美は、乙葉に入園時に貰った園内マップを見せた。

二人は森林公園を出た。

「未完成の城なんて面白かったですね～！看板と堀と土塁しかなかったけど…。次回はどこに行きましょうか？」

乙葉が晴美に聞いた。

「次回？ふふふ、乙葉よ！今日はもう１ヶ所行くぞ！」

「マジですかー！？」

嬉しそうな顔をする乙葉。

二人はバスで森林公園駅まで行き、そこから電車で隣駅の東松山へ。

そしてバスで吉見百穴前までやってきた。

「吉見…百穴…？先輩！私、戦国以外はあんまり興味が…」

「何を言うか乙葉！この吉見百穴も実は戦国に関係あるのだ！まぁ、まずは観光がてら見てみようではないか！」

はい、と返事をして百穴へ。

「因みに、観光マップ等には『吉見百穴（よしみひゃっけつ）』とでてるが、地元民は『吉見百穴（よしみひゃくあな）』と言うらしい。私は、ケツでもアナでもどっちでもいいと思うけど…」

さらっと行った晴美。

「…先輩。下品なことは言わないでくださいよ…」

少し顔を赤くした乙葉だった。

「で、ここは何ですか？戦国とどう関係が…？」

乙葉が聞いた。

戦国以外は守備範囲外の乙葉には、ただ崖に穴が無数に開いているだけのようにしか見えない。

「これは古墳時代の後期に作られた墓だ！ちょっと後にいろいろ合って完璧な姿とは言い難いけど…」

「古墳時代！？いろいろ…？」

無数の穴があいている崖には、いくつか洞窟があった。

その洞窟を指差して晴美が言った。

「これ、日本軍が戦争中に開けた穴なんだって…。ろくなことしないよね…。日本軍…」

ちょっとテンションが下がった晴美。

「そうですね…」

「まぁ、ここをぶっ壊したのは日本軍だけではないんだがな！」

いつものテンションに戻った。

起伏の激しい性格である。

「実は…あの武田軍が…！このすぐ横！松山城を攻めるために使ったのだ！」

一つの山を指差して晴美が叫んだ。

「松山城って…！関東を抑えるためにあの北条・上杉・武田で奪い合ったっていうあの城ですかっ！？」

「そうだっ！」

ここにきてやっと吉見百穴まで来た理由がわかった乙葉。

そうともなれば…。

「なるほど…。山、背後は川…。これは城を建てるのに抜群の場所ですねっ！」

すぐに地形を観察し始めた。

「武田軍がこの松山城を攻め落とすとき、吉見百穴から近トンネルを掘る手段を使ったんだが、行きついた先が水源で逆に武田軍に被害がでたんだ。でも、それのおかげで城内は水が無くなり、武田軍は勝利したって逸話がある！」

「第二の意味の水攻めですね！」

「そうだ。よし！では、松山城に行こうじゃないか！」

「はいっ！」

吉見百穴から城の周囲を歩いて行った。
しかし、入口が見つからない。

入口と言っても、見た目は何も残っていない只の山。
入りやすそうな場所を見つけているだけなのだが…。

「ここしかないですね…」

乙葉が示したその場所は…。

岩室観音。
地蔵が祀ってある建物があるが、奥に通じている。

通じているとはいえ、水が流れる足場の悪い急斜面を登ることになるのだが…。

乙葉がはふと、岩室観音の説明看板を見た。

「なになに?天正時代に石田三成が夏山城を落した時に一緒に本堂が燃えた…。ってえ!?三成!!」

看板を読んだ乙葉がはためらうことなく急斜面を登って行った。

それに続く晴美。

「この感じ…。もしや松山城へ続く当時の切り通し…」

いろいろ考える余裕はあるようだ。

急斜面を登り終えた二人。

少し奥には石碑が建っていた。

「松山城跡」と彫られた立派な石碑だった。

「ここで…北条や上杉や武田が…!そう思うと感動です!」

目がうるうるしてる乙葉がそこにはいた。

「…あっちも行ってみよう!ここは本丸みたいだし、他の郭とかも!」

晴美が促した。

「はいっ!」

「うあ〜…。雑草が多くて…ってギャー!毛虫!毛虫!」

毛虫で騒ぐ乙葉。
苦手らしい。

ところどころ案内看板が立ててはあるが、それも雑草に埋もれそう。
看板以外は一面雑草である。

「兵どもが夢のあととは、よく言ったものですねぇ」

そんなことに妙に感心する乙葉をしり目に晴美は背負ってきたリュックをあさっていた。

そして取りだしたもの…。

「う、うあー！先輩！何持ってきてるんですかぁ！」

乙葉は思わず悲鳴に近い声をあげてしまった。

それのその筈。
晴美の手に握られていたもの…それは。

「これか？これは鎖鎌だ！雑草を着るのに便利かと思って！」

「物騒です！危ないです！しまってくださいぃ！」

「物騒ではない！あの大化の改新で蘇我入鹿が討たれた武器も鎖鎌だったのだ！」

「今自分でとんでもない武器持ってますアピールしましたよ！」

結局、晴美は鎖鎌をしまった。

その後二人は春日郭、門の跡、堀、土塁などを見て松山城を出た。

「…先輩。あんな大変な思いして急斜面登らなくてもここにご丁寧に入口ありましたね…」

普通に「松山城入口」という大きな看板が立っている階段を見つけてしまった二人だった。

「まぁ、切り通しも見れたし！良しとしようじゃないか！」

「そうですね！って…。切り通し？」

「初めに登ったあれ、切り通しだぞ！？」

「ウソー！？全然意識しないで登っちゃったじゃないですかぁ…」

肩を落とす乙葉であった。

歴史絵巻第三幕　Ｌｅｔ＇ｓ　Ｇｏ　城巡り～山田城・松山城～（後書き）

山田城に関しては情報が少なすぎて…。

森林公園の中です。

紅葉見るついでにどうでしょう？

松山城は石碑があります。

岩室観音から登るのはオススメしません。

切り通しが見たいなら別ですが、危険ですので。

普通の道、山からおりた後で知りました…。

今回からしばらくは、跡しか残ってない城がやたら出てきます。

私が行った城、大阪と小田原以外は遺構巡りですので…。

三十四番槍　優れた武勇が仇となる（前書き）

乙葉
「最近、本編の更新ペースが遅いですねぇ。先輩？」

晴美
「なんか、良い逸話がねー！、とか作者が言ってたぞ」

乙葉
「ああ…。ネタ切れなんですね…」

晴美
「だな。まあ、まだ超有名所しか手を出してないから大丈夫だろうけど」

乙葉
「だといいんですけど…」

晴美
「今回は誰の逸話だ？」

乙葉
「戦国最強の息子です！」

晴美
「なるほど…！」

乙葉

「そういえば私たち、本編の前書き初でしたね」

晴美
「だな…」

晴美＆乙葉
「では、始まります！」

三十四番槍　優れた武勇が仇となる

甲斐の虎、武田信玄の四男として生まれた武田勝頼。

四男ながらも嫡男となった。

そんな彼は、戦において数々の武功を上げている。

初陣では取っ組み合いの末に敵大将を撃破。

ある時は敵の騎馬兵が5騎で攻めてきた際に、単騎で迎え撃ったりもした。

上杉謙信の1万5000の大軍に800の兵を率いて突っ込んだりもした。

まさに最強の兵だった。

しかし…。

「勝頼様は、大将となるには致命的な欠点がある」

そう言ったのは山県昌景。

彼も武田家重臣の一人だった。

それから暫く後、武田信玄死去。
勝頼が家督を継いだ。
…そして、長篠合戦。
5月8日。奥平貞昌が率いる５００の兵が守る長篠城を勝頼率いる武田軍が攻めた。
「空堀が3重に…。反対側は2本の川…。うざっ！」
「大丈夫！俺強いし！あの父もできなかった高天神城を落としたのも俺！俺は父より強い！行くぜー！」
勝頼は重臣の意見など殆ど聞かず、長篠城に応援に来た信長と戦うことにした。
家臣たちは湧き水で乾杯して出陣し、大半は信長の鉄砲に散っていった。
2時頃には武田軍は1万５０００の軍が５０００にまで減っていた。
「山県…。武田軍は無敵だ…。お前も行け！信長を討ち取れ！」
山県に勝頼が言った。
「もう武田は完膚無きまでにやられた！負けたのが分からぬのか！」

山県は自分の主君に対して叫んでいた。

「わしが殿(しんがり)を…。その隙に、殿は逃れてください！さらば！」

こうして、山県昌景も戦場に散った。

「負けた…。俺が…、武田軍が…、騎馬隊が…」

その後勝頼は天目山の戦いで切腹。

武田は滅んだ。

山県の言う「大将としての致命的な欠点」を信長に見抜かれてしまった結果だった。

三十四番槍　優れた武勇が仇となる（後書き）

ん～。
長篠合戦は単品で書いた方が上手くいくのかな…？

武田勝頼は一人の兵としては優秀でした。

しかし、大将になると信玄の家臣より自分の家臣の意見を優先したり、自信満々で油断したり。

山県さんの言葉がよく分かります。

大将の器じゃなかったんですね。

因みに、勝頼は切腹してますが、彼の名言の中には「追い詰められて腹を切るより敵と戦って果てたい」と言うのがあります。

え…？
あれ…？

あんまり自信満々で油断しちゃいけない！ってことですね！

（最近ネタが無くてね～…）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5665x/

日の本のお殿様

2011年11月26日00時54分発行